躑躅咲て石うつしたる嬉さよ　　蕪村

などが名句として現はれて居る。

盆栽としては、温泉躑躅が、花も葉も小形であるから一番適當であるが、今の皐月や、霧島を好み、その流行を逐ふ人には喜ばれない。その培養法を記すと、先づ土は、壤土に砂を等分に入れ、よく混ぜ合せ、春の彼岸前後に、植替を行つてやる、植ゑる時には成るべく、柔らかに、根の許の固らぬやうにするのである、庭木にしても、根を踏みかためると、樹を弱らせてしまう。

肥料は、地植の中には、極く稀薄な人糞を施してやり鉢に取つてからは、油糟を薄めて用ゐる、元來が強壯の木ではあるが、姿勢を作るには、注意しないと、平凡なものになつてしまうものである。

梨（なし）

二三年以來、雜木盆栽の流行と共に梨の盆栽も、漸次愛好者を增して來た、花のみでなく果實盆栽としても面白いからであらう。

先づ其の順序として、『なし』の語源から說かねばならぬが、新井白石は、其の著『東雅』の中に記して曰ふ、

我が國の俗、ナシをもて呼ぶものゝ如きも、凡そ核脆くして酸く澁く、核中の子小圓なるものどもをいふなり、是等のことに依りて思ふに、古語の中をナマといひけり、其實甘くして核の中、酸きによりて、ナスといひしを、其の語の轉じて、ナシと謂ひしも知るべからず、備前國磐梨郡をばイハナスといひしと見えたり。

これは、核の周圍が酸味多く、ナカスといふべきを、ナシに轉訛したといふらしい。今の處、之より深い研究が無いとすれば、姑く此の論を是認しなければならぬわけである。

文學上の方面を見ると、流石に梨の觀賞植物たる本領を發揮して居る、其の花も、

櫻や海棠のやうに、艶麗な姿は無いが、清楚といふ點では、亦別の趣きがあり、古來詩人墨客の筆に、詠賦せられたことが少くない、其の中でも、有名なのは、詩聖白樂天が、『長恨歌』の中に美人楊貴妃を形容して

梨花一枝春帶雨、含情凝睇謝君主、一別音容雨渺茫、昭陽殿裏恩愛絶。

と賦したのが、古今の絶誦、梨花も此の位に形容されれば、不滿はあるまい、清少納言はグッと之を碎いて

梨の花、世にすさまじく、怪しきものにて、目にちかく、はかなき文つけるなどだにせず、愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりして、あいなく見ゆるを、唐土にかぎりなきものにて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ、楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて、泣ける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帶びたりなどしたるに、おぼろげなるらしとおもふに、なほいみじくめでたきことは、たぐひあらじと覺えたり。

其の末句の如き、梨花に對し、無上の褒め言葉ではないか。

きゝわたるおもかげ見えてはる雨のえだにかくるるやまなしの花　民部卿爲家

これも楊貴妃に關係が深い、此の外和歌でも、俳句でも梨の花を論ずる時、詠ずる際に、多く此の楊貴妃がお引合ひに出される、之を思へば、白樂天の偉大な文字が、今更ながら感嘆される、して見れば、梨の花に取つては、誠に白樂天は知己といはねばならぬ。

然らば梨の、觀賞方面としては、花ばかりかといふと、決してさうではない、果實の方も、その枝先に大きな實をぶら下げて居る處は、確かに面白い、梨園にあつて、一定の形に作られ、上には棚を作られてしまひ、幾本あつても同じやうな姿をして居る處は、餘りに千遍一律過ぎて、面白味は少いが、自然の儘の形にして、實のついた處を、一枝折り、之を花瓶にさすと趣味も格別で、花とは亦變つた味ひがある、盆栽

は即ち、此を永久的に眺める方法に外ならぬ。

扨て果實の方の文學的趣味を觀察しやう、先づ其の別名や雅名を見ると、支那では、『雪掖』『含消』『玉實』『映果』『玉乳』『蜜父』などゝ呼ぶ、表皮の黄色な點も現はれて居れば、内部の雪のやうな肉にも及ぼして居る。

かた枝さす麻生のうら梨はつ秋になりもならずも風ぞ身にしむ　宮内卿

かた枝はなりもならずもつま梨の思ふあへりやねてはかたらふ　信實朝臣

序に、葉も秋になると、紅葉して美しくなる、之は梨紅葉として『萬葉集』時代から、人々に賞觀されたやうである、柿本人丸の歌に

もみぢ葉の、にほひばしげり、しかはあれど、つま梨の木を、手折りかざゝむ、露しもの、寒きゆふべの、秋風にもみぢにけりな、つま梨の木は

など、その一例で、由來俳句などにも、立派に季題に收められて居る、觀賞的方面から見た梨は、かくの如く、決して貧弱なものではない。

梨の觀賞方法としては、茲に記した通り、花と果實と兩面を見ることが出來るが、夫れには盆栽に仕立るのを最も良い方法とする、併し花を主とする場合と、果實を主とする場合とは、自ら手入などが違ふ、先づ姿勢は、苗木から育てゝ、剪定により漸次鉢に納まるやうにするのであるが、夫れより更に理想的のものは、實生である、年數のかゝるのは仕方がない、食べるのが主ではないから、強ち種類を撰ぶ必要は無いが、出來得る限り自然に近いものがよい、培養土は壤土七分に砂三分位を加へたものがよく、土地の工合も見て、多少濕氣の勝つた處ならば、砂を多くする、植替を行ふのは、春先發芽前後を最上とする、花が開いてから植替をすると、樹の力を鈍らしめる。

果實を主とした場合には、秋の彼岸頃植替へる、肥料は植替後三週間を經て、油糟の稀薄にしたものを、度々施してやる、初めは極く稀薄にし、漸次濃厚にするがよい、梅雨頃になると、漸く結びかゝつた果實を害蟲に襲はれることがあるから、十分注意して其の驅除に努めなければならぬ、水は結實前後から成るべく多量に施こしてや

る、水が十分でないと決して立派な果實は結ばぬものである。

櫻桃（ゆすら）

櫻桃は、春から夏へかけて眺める盆栽の中で極めて特長のある植物である、春の初め、白い雪のやうな花を開くのも興味が深いが、第一その幹が古雅なので、冬の落葉後も面白い、葉も圓味を帶びて、野趣あり、かく、總ての方面に遺憾なく特長を發揮して居るが、それよりも、此の木の最上の美を現はす時は、實に夏の結實で、萬朶悉く珊瑚瑪瑙の寶玉を、瓔珞のやうに綴つた時にある、果實の觀賞は多く秋だのに、夏此の風情を見せる櫻桃はそれだけでも充分に珍重さるべき資格を具備して居る。

櫻桃は其の和名を『ゆすら』と呼び、昔から庭園によく栽培されて花や實を賞したものである、果實は其形、色彩の美しいのみならず、之を食すれば風味亦美味で、昔の人は甚だ之を貴んだ、『ゆすら』は隨分所に依つて稱呼も違つて居る、京都では『ゆすらこ』と呼び、大和邊では『ゆさりん』と唱へ、關東では『ゆすら』若しくは『ゆすらうめ』などゝ呼ぶ、『ゆすら』といふ語源に就いても、種々の說があるが、此の樹小枝密生し、風吹くごとく甚しく搖れる、开で『ゆする』と呼做したのが、後世『ゆすら』に轉訛したのであらうといふ。之は谷川士淸が『和訓栞』の說であるが、最も眞に近いと稱せらるゝ所である。支那では古來文學にも澤山現はれて居るが、又夥しい別名や異名がある即ち、『嬰桃』『含桃』『楔』『梳桃』『朱桃』『石朱』『密麥』『英麥』『甘朱』『梅桃』『玉桃』『牛桃』『末星』『瓊液』『英桃』『丹砂顆』『樫桃』『朱茱』『朱櫻』『伊士介叱』等皆夫れで、之に其文字の如く、概ね果實及花に依つて命名されて居る。

櫻桃の來歷に就いては、日本固有の植物であるが、外國から渡來したものであるが餘り詳かでない、唯『宇治左府賴長公記』に左の一節が記されてある。

天養二年五月三日、權大納言宗輔、鶯の實を送る、和泉國より尋ね取りものなりと、其色紅、大さ碁石の如く、其體圓く、その核微小、三種あり、之を食するに

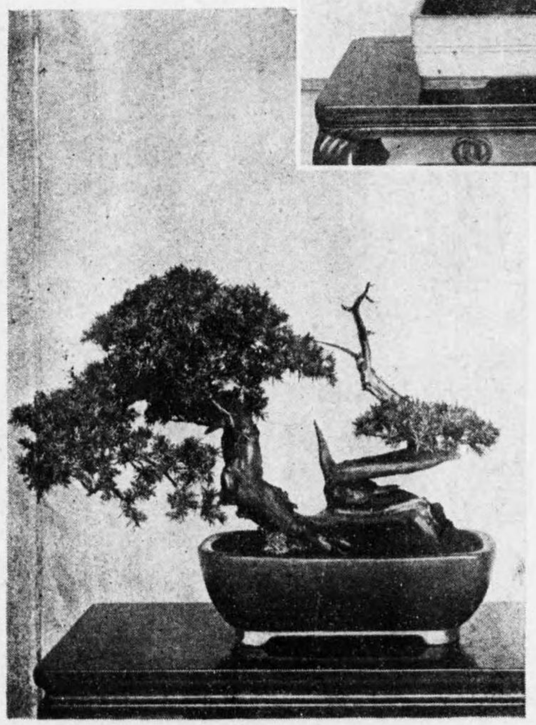
其味賞翫するに堪へたり。

此處に所謂『鶯實』とあるは、今日の櫻桃である、其頃大和國から產したものとすれば、本邦固有の植物とも思へる、支那では櫻桃を以て宗廟に献じ、儀式に用ゐられたことがよく書物に見える。

櫻桃の培養法は、先づ第一に培養土の選擇が肝要である、それは普通の壤土、即ち眞土七分に三分位の割合で砂を混合する、砂は赤砂か川砂が適當で、黑砂即ち富士砂は此の樹には適しない、先づ此の培養土を適宜に作り、年に一回此の土を以て植　をしてやる、此の植替は櫻桃の培養上、最も大切なことで、植替をせぬ時は、唯さへ小枝の多いのに、益々殖えて行つて、忽ち整つた姿勢を崩すやうなことになる、植替の期節には種々な說があるが、矢張春先を以て最上とする。

植替がすんだなら、少し間を隔てゝ極く稀薄にした油糟を、一週間に一回位施してやる、分量には餘程意を用ゐ決して其量を過さぬやうにする、多過ぎれば却つて其樹

落葉松（上）
直幹で、姿勢極めて溫健、宛ら千年の老樹を見るが如き思あらしめる



杜松（下）
双樹ではあるが、一方は「神」となり古色蒼然たるもの蕭白蛇足あたりの筆を見るやうである。

の勢を弱らせてしまう、若しかゝる場合になつたら、一度花も果も附けぬやうにして地植ゑにしてやる、一年も經過すれば、大概立派に回復出來るものである、姿勢を作るのは冬が適當で、此の樹の肌は裂け易いから成るべく叮嚀にし、若し裂けたら外から空氣の浸入せぬやう塞いでやる、置場は空氣の流通よく、適度の日光浴も出來る所でなくてはならぬ、總ての盆樹皆さうであるが、櫻桃のやうに小枝の密生する種類には、殊にさうした注意を忽にしてはならない。

落葉松（らくえふしよう）

春の芽先から、夏の緑葉、冬の落葉と、四季其姿を改めて往く落葉松は、數ある松の種類の中で、際立つて趣味の深いものである、朴訥な鉢や枝に春先鳶色の玉を綴り、漸次其の中から緑色の芽を繰り出し、菊の花のやうな形になる愛らしさ、その緑色滴るばかりの美しさは、眞に他の松類の及びもつかぬ處である。

さて此の落葉松には、種々の別名や異名があつて、所に依りその稱呼を異にして居る、その葉の形、唐繪の松のやうだとて『からまつ』と稱へ、富士山中に多く產するからと云ふので『ふじまつ』とも呼び、日光山中にもあると云ふ處から野州邊では『日光松』とも名附けられて居る、その他『つし松』は此松に對する古い雅名であるし、『金錢松』とは開いた葉の形、圓く金錢に似て居るとてかく呼ばれて居る、其他、支那では字音の如く『落葉松』といひ朝鮮人は『柏子』と書き、日本には姫小松を以て充てゝ居る人もあり、『和漢三歲圖會』には左の如く記して居る。

按ずるに、落葉松は、春葉を生ず、七刺或は五刺、括るが如く細小にして軟かく、淡綠愛すべし、信州木曾及富士山にあり、故に俗に富士松といふ、京師にては姫小松といふ、多く長じ難し。

盆栽としては、普通の松のその葉やゝもすれば長きに過ぎて幹や枝と調和を缺くのに反し、落葉松はその葉漸く二三分、然も其の枝に附着する樣、如何にも雅致に富んで居るので、直幹に仕立てゝも、懸崖に作つても、寄植にしても殆んど往くところ佳ならざる無く、更に秋の末から綠葉悉く落ちて、素朴な枝や、幹を殘した處、又古色蒼然として數ある落葉樹中の逸品である。

次に第二の特長ともいふべき葉の色彩美である、落葉松の綠は眞に他の色を少しも混じて居らぬ眞の綠色である、此故に夏の觀賞には殊に適して、一盆を其室に陳列する時は、忽ち涼風腋下に生じて、夏の暑さを忘るゝ感がある、なほ此樹好んで水邊に成育するので、水との調和が非常によいのである、富士の裾野を旅行した人々は、その裾野一帶、殊に河口湖の附近から、精進湖、西湖の邊が如何に鮮かな美しい綠に彩られて居るか、一步此地を踏んだ人の終生忘るゝことの出來ぬ印象を留むるであらう。

併しながら落葉松は、盆栽としては誠に仕立るのに困難なもので、今日まで數多の盆栽家が苦心に苦心を重ねた處である、隨つてその培養法の如きも人に依つて異ふか

ら、何れを取つて好いのか一寸迷ふ、例へば肥料にしても、全然施さぬ方がよいといふ人と、施した方が出來がよいといふ人と二説ある、植替の如きも、その可否を論じて中々判斷に苦しむ、だから之は先づ落葉松その物の生育狀態を仔細に研究し、その最も發育のよい土地の地質や氣候を考へ、之を盆栽に應用するのが一番捷經であると思ふ。

先づ植替から研究して見る、落葉松は水邊濕地を好む植物で、乾燥した土地は全然不適當である、一年間なり二年間なり盆栽として、相應に馴れた土を俄かに植替へるとすれば、その間若し前と成分の違ふ培養土であつたなら、必らず發育に故障を生じて來る、この故障は又極めて起り易いのであるから、危險といふことを考へれば寧ろその儘にして土に多少の肥料分を絶たぬやうにする方がよい、若し止むを得ず植替を行はねばならぬとすれば、比較的感受することの鈍い發芽前に行つた方がよい、それには三月上旬が最も好期である。

培養土は如何なる土がよいか、之も自然の生育狀態に艦み、富士山の砂七分に眞土三分を加へた位が最も適當である、土には前に述べたやうに濕氣を絶えず含ませ、水や空氣の流通をよくする、次は肥料であるが、如何なる植物にも全然肥料無くして成育するものはない、多少濃淡の違は有つても自然に攝るべき營養は取つて居るのである、落葉松に依つて見るのに、その發育良好な青木ヶ原などの例に見ても、一帶が濕地故、木の葉など早く腐敗し、之が腐蝕土となつて、立派な肥料分を含んで居る、して見ればその土に含まれた肥料分の濃淡を量り、それに代るべき鶏糞でも、油糟でも極く薄くして施してやることが必要である、日光浴は餘り烈しい土用中などは矢張避けてやる方がよい、富士山の側に見ても南面の日光強く當る所には少く、北部の薄い方にはよく成育する、總て此の呼吸をよく會得して、之を仕立て上げれば、からすやうなこと無く、立派に盆栽として賞翫し得るに至るであらう。夏季の灌水等も、かうして怠らず、注意する灌水を怠ると、直ぐ弱つてしまうのである。

杜松（としょう）

著者は曾て杜松を繪畫に見立て、曾我蕭白に擬したことがあるが、其樹の姿一寸杉に似て、杉のやうに直幹のものばかりでなく、枝は垂れて葉は細かに、稍もすれば根幹蟠屈、寸にして千歳を經た大樹の俤があり、蕭白の豪宕な處に似て居り、殊にその肌の荒れた點、葉の短く鋭く深綠の中に白色を帶びた處、如何にも森嚴な趣を具へ、或物は懸崖に、或物は寄植に殆んど往く所佳ならざる無き重寶な樹木である、松杉科に屬する盆栽中、眞に松柏に次ぐ大立物で、よく一般園藝家の觀賞を受けて居る。

杜松は和名を『ねずみさし』と呼び、或は『ねず』『むろ』『むろのき』『ひむろ』などゝ呼び、『檉』の字を用ゐ、樹木中聖なるものとしてある『沈烱賦』にも

檉は柏に似て而して香し

とある、日本の文學には極めて尠く、和歌などに詠ぜられたものも甚だ少ない、此點に於いては此樹も不幸なものといはねばならぬ、左に一二首擧げて見やう。

岩なかに根這ふむろの木なれみればむかしの人をあひ見るがごと　新撰六帖

時雨るれど秋の色にはなれ磯にみどりかはらず立てるむろの木　同

近來小品盆栽の流行に連れて、杜松の盆栽は益々園藝家の愛翫を受け、四季何れの陳列會などにも、この樹の姿を見ぬことは稀れである、目下行はれて居る盆栽の仕立方には、懸崖もあるし、石附もある、双樹にしても寄植にしても何れにせよ、杜松の趣味は發揮されて居るが最も多いのは、森林を模した畫尙暗き寄植や、深山幽谷に自生した姿を寫し幹や枝の、苔の衣に蔽はれた態で眞に仙骨稜々、俗の世のものではない心地がする。

杜松は我が國固有の植物で、殆んど全國の森林帶に分布し、材は各方面の工藝品に、果實は藥用に供せられ、庭園にも植ゑられて居るが、盆栽の原料としての樹は、遠州地方の產出が最も多く、三州、尾州の各地の森林から產出する樹も、葉性幹枝古

色を帯びて居る、然し老樹の尤物に至つては、遠く人寰を離れた深山の岩角などに自生し、之が採集には往々其の命を落す人さへある。

盆栽としての培養法は、一般の盆樹と甚だしい差は無い、唯植替の如きは餘り行はぬ方が結果よく、若し行はねばならぬ場合は、春先三月の中旬に行ふがよい、葉に光澤を增さしめ、幹にも古色を附けるには、肥料の加減を忘れぬやうにし、一週間に二三回位は施してよく、肥料の種類は、油糟か乾鰮で、油糟ならば一合に對する水三升に和して用ゐ、乾鰮なら半分位に切つて、鉢の左右に埋めて置く。

幹を矯めたり、枝を曲げたりして姿勢を作るのは、春先の未だ新らしい芽の見えぬ時がよく、銅の針金を用ゐて幹から枝へ叮嚀に懸け、思うやうに曲屈させる、針金は銅に限り決して他の亞鉛などは用ゐてはならない、剛い針金を使用すれば樹を傷め易いからである。

手入は中々骨が折れる、何故かといへばこの樹は、四時絶えず、芽を出すからで、枝先に柔かい葉がどん〳〵出て來る、これを若しその儘にして置くと、新芽は容赭なく伸びて忽ち姿勢を崩してしまう、注意すべきことである。

蝦夷松（えぞまつ）

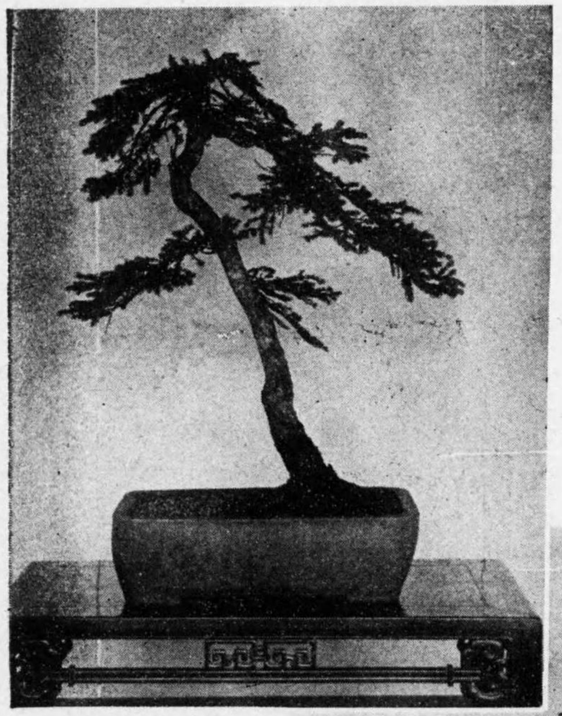
蝦夷松は一名『とど松』とも呼ぶ、杜松と同じく松杉科に屬する喬木で、その樹容、樅に似て氣品高く、葉にも一種の雅味がある、杜松や丁尾松（唐檜）一位木等と共に、盆栽として洽く仕立てられて居る、蝦夷松の名は言ふまでも無く北海道の森林に最も多く產出するからで、彼地の森林は此樹に依つて美しい色彩を見せて居るのである。

盆栽の原料として多數掘り出されるのも、多く北海道若しくは樺太で、野生のままの未成品が既に寒氣の爲めに、一種の形態を具へ、恰も天然の大樹に彷彿たるものがある、之を盆栽として、培養するに當つては、先づ温度に關する注意を怠つてはならない、置場は殊に寒い場所を擇んで作り、日光浴も餘り烈しい際は避けてやる、若し

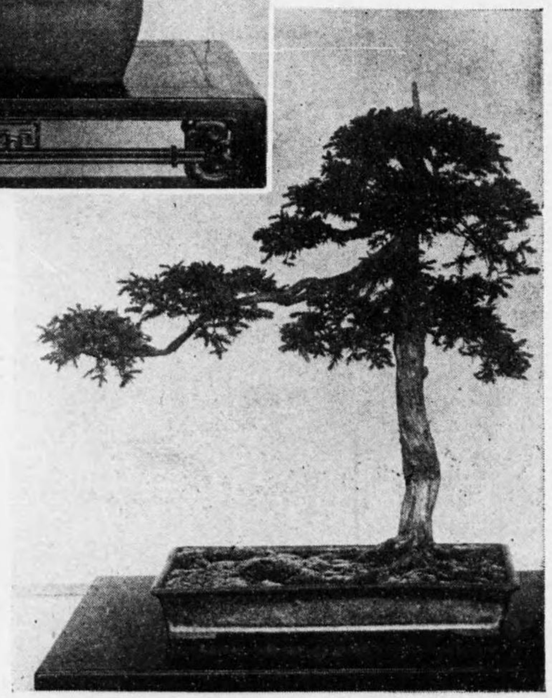
その儘土用中の炎天にでも曝して置くと葉先が忽ち損じてしまうものである。

次は植替であるが、之は普通の盆栽と同じく、年に一回行つてやる方がよい、時期は春先三月中旬頃が最も好い期節である、植替が終つた後、直ちに肥料を施すことは、樹の爲めに甚だ悪い、是非數日間を置かねばならぬ、かくする中、枝先からは鮮かな緑色した新芽が、だん〳〵繰り出して來る、肥料は此の折を見て施すので、肥料の種類は杜松と同じく油糟を稀薄にし、一週二三度施してやるのであるが、鰮の締糟がよいと云ふ説もある、何れにしても大差はない、その與へ方は締糟を水に浸し、よく溶けた頃を見計ひ一週間に一二回與へるのである。

蝦夷松の培養土は、矢張自然に成育して居る土地の性質に適するやう、壤土に黒砂を約四分程加へ、植替の際之を用ゐるのである、砂を混ぜる時は、根に來る各種の害蟲を防ぎ、空氣の流通や水拔きをよくし、樹に取つては根下しに甚だ都合がよい、若し砂を入れず土を固めて栽ゑる時は、根は忽ち蒸れて大害を醸すことになる、灌水は



蝦夷松（上）
土佐派の前景を見るが如き感じがある、上部の枝の巧妙さを見よ。



杉（下）
左方に伸びた枝やゝ長きに過ぎては居るが、この枝に俳趣味を潜ませ本幹は尖端を「神」として立派に約束を守つて居る。

充分にしてやるが、夫れが根元に溜つて居るやうではならぬ、土を濕して直ぐ出てしまふ位の程度でよい、夏になつたら必らず、葭簀の下へ取入れて、嚴に西日を避けて置く、かうして培養すれば、必らず其効果が現はれて、立派なる姿勢を見ることが出來るのである。

なほ鉢の撰擇に就いて一言附加へて置く、蝦夷松はかく豪宕にして素朴なもの故、餘りに纖細な技巧の鉢は調和しない、白交趾か、南蠻、烏泥、紫泥の中から擇べは、大抵は調和するものである。

杉（すぎ）

杉は日本固有の植物としては、知られて居るもの丶、盆栽としては比較的新しく、確か明治四十三四年頃、勅題に『社頭の杉』が現はれたころからである、元來、杉は松と同じく、松杉科に屬する常緑喬木であるから之を盆栽として仕立て、觀賞するには

四季何れの時にも適するのであるが、その本來の美觀は夏を以て第一とする、殊に之を石附として水盤に盛り、根洗ひとして名石に添へる時は、雄偉壯嚴、眞に他の盆樹の企て及ばぬ妙味がある。

殊に此樹は植物學上貴重な樹木で、日本と支那には古くからあるが、歐米には絶えてその姿を見ることが出來ぬ、さすれば充分其の保護をして、根絶を防ぐやうにしなければならない。

『杉』の和名『すぎ』に就いて其語源を研究して見ると、この樹は單獨に成長することを好まず、多く群生し、地質は甚だ濕潤な所を好み、幹は唯一直線に天に向つて伸び、矗々雲を衝くの概がある、开で『直ぐなる樹』と云ふのが、轉じて『沙木』となり、『須木』と變り、終には『杉』の字をも『すぎ』と讀むに至つたのである。

その鉾形に連並み立つ姿は、眞に雄大にして崇嚴なものであるから、單に森林として繁殖せしめるばかりでなく、古來神社佛閣に植ゑて、その莊嚴の觀を增した、現に日光に殘る大杉並木の如きは、全世界に比肩するもの無き雄大な風光を作つて居る、唯夫ればかりでなく、その崇嚴な姿から、杉に關する口碑の如きも諸所に傳へられ、神木として尊崇されて居る名樹名木も少くない。

杉の我が國に於いて最も古く文字に現はれたのは、恐らく『古事記』上卷、素盞嗚命が八岐の大蛇を退治し給ふ條であらう、その八岐の大蛇の形容に曰く。

彼が眼は赤加賀智(酸漿)なし而して身一つに頭八つ尾八つあり、亦其の身に蘿又檜榲生ひ其長さ、谿八谷、尾八尾に度りて其の腹を見れば悉に常も、血爛れたり。

とある、尙『萬葉集』にも十卷に柿本人丸の作で有名な

いにしへの人の植ゑけむ杉が枝にかすみたなびくはるは來ぬらし

石のかみふるの神杉かむさびてわれやさらさら戀にあひにける

の二首を收めて居る、『新古今集』には藤原定家が

待つ人のふもとの路は絶えぬらむ軒端の杉に雪おもるなり

と優しい情緒を舒べ、『夫木集』には

杉ふかき片山かげの夕すずみよそにて過ぐるゆふだちの空　涼苑

と美しい位の歌を載せて居る。俳句では

涼しさのまことは杉の梢より　立圃

みわの山で杉立するやはる霞　沾徳

槍になり長刀になり杉のゆき

春は霞、夏の涼み、冬の雪、何れも杉の美を遺憾無く發揮して居る。建築用材として、需要の廣いことは、今更いふまでもない、酒樽として、酒を貯へる時は、香を深く、味をよくするとて此の方面にも、需要が多い。

杉の種類は普通『白味』『赤味』の二種に區別して居るが、園藝上からは、數種の多きに上る、『唐杉』はその葉柔かに『江戸杉』は葉小さく硬く、色は淡くして仲冬紅葉を呈し三月綠葉に還ると稱し、その他『猿猴杉』『糸杉』『垂糸杉』『岩根杉』『神代杉』『屋久杉』『眞杉』等で、盆栽としては眞杉がその葉の小さい點から、廣く用ゐられ、神代杉は長く水中に垂れ、幹の内部黑く變色したもの、種々の材料になつて細工されるが、園藝上には唯其の名の存するばかりで、一向に交渉も無い。

三月頃花を開き、實を結ぶ、實の大さは米粒位で、松や柏のやうに風媒花である、普通森林にあるものは、五十年にして幹の高さ八丈、幹廻り四尺餘に達する、盆栽としては僅か一尺内外の樹でありながら、二十年位經たものは澤山ある。培養法は、五月上旬一回植替をしてやり、古幹は大切に保存して、新芽や新枝は容赦無く剪定してやる、肥料は多量に好むものであるから、月に五六回充分に施してやらねばならぬ、ともすれば葉や幹が醜くなるもの故手入は寸時も怠ることが出來ない。

從來盆栽としては、直幹にも、石附にも、寄植にも種々に仕立てられてあるが、元來直幹の樹であるから、之を懸崖に仕立てたりするのは、心無き業といはねばなら

ぬ、幹の太いものなら、一株でよく、自然の大木の面影を見せることも出來るし、よれ幹ならば、寄植にして森林の風情を摸しても面白い。

檉柳（ぎよりう）

夏の盆栽中凉しい氣持のものといへば先づ何人も檉柳に指を屈さねばならぬ葉色の翠滴るが如く楚々露を含んで立つ姿、更に其の葉先から煙のやうに現はれる淡紅色の花、誠に三伏の暑さを忘れしめる。

檉柳は、檉柳科に屬する落葉の喬木で、自然生のものは樹の高さ約一丈位になる、元來支那が原産地で、古く我が國に渡來したものである、名稱は普通に『ぎよりう』と呼んで居るが檉の字の音は『テイ』であつて『ギョ』では無い、何故に『ギョ』とよむか、是れには種々説があり、夫れが中々趣味が深いので、一層此の樹に親しみを深くせしめるのである。

先づ檉の字から解釋すると、この樹、水邊を愛して、不淨の地に生ぜず、葉は濕を喜び、雨を豫想する、樹木中の聖なるものとして、『檉柳』と呼ぶとの事、尚別に『漁柳』とも書く、之は前に述べたやうに、水邊を好み、枝は水に臨んで低く垂れる、开で大公望の釣魚に因み、『漁柳』と書くのであると、之は聊か無理のやうである。

次は『御柳』の音を、『檉柳』の稱呼として丁つたと云ふ説で、唐の玄宗皇帝の時、楊貴妃大に之の樹を愛し侍者をして、これを後苑に栽ゑしめ、簾を隔てゝ之を眺めた、开で時人此の樹を尊稱して御柳と呼び、遂に檉の字まで、ギョと云ふやうになつたと云ふのである。『御柳』の文字は此時から盛に使用され、現に『唐詩選』に載つて居る李澄が詩などにも『御柳遙隨天仗發、林花不待晚風開』と謂ふて居る。

夫れから、檉の字義に就いて、此の樹が雨を豫知すると云ふことは、『童蒙字訓』其他諸書に記載されて居る、字訓に據ると

檉葉細如ㇾ絲、婀娜可ㇾ愛、天之將雨、檉先起氣以應之、故一名雨師、而字从ㇾ檉

とある、實際曇天となりて、空氣に濕氣を帶びて來ると、此の絲のやうな葉は忽ち針のやうに立ち上る、其の時の壯觀は亦盆栽の趣味を深く味ひ、之を愛するものでなければ解らぬ『雨師』と云ふ名も頗る面白いではないか。

從來檉柳を愛する人が、異句同音に謂ふことは、持込が困難だと云ふのである、夏の中は美しく眺めても秋の中頃から、葉が黃色となつて落ちて來る、枝の先が枯れて、折角今まで美しい姿勢を備へて居た樹が宛るで姿が變つてしまう、落葉樹であるから、葉の落ちるのは止むを得ぬことであるが枝枯のするのは、困つたもの、开で種々工夫を積む、昨今は漸く檉柳を難物呼ばゝりするものも少くなつたやうである、即ち從來、檉柳の枝を枯らしたり、根を腐らせたりしたことは、此の樹の性質をよく理解してやらなかつたことに起因するのである。

先づ第一は灌水の注意である、水邊池塘を好んで自生する植物を、僅かに一尺か一尺二三寸の鉢に栽ゑるのであるから、土も不足であれば、肥料も不足である。殊に今迄は恣に水を根から攝取して居たのに、夫れが鉢となるのであるから、其の分量も變つて來る、之が枝枯となる第一の原因である、故に灌水は充分にしてやる、鉢の儘水中に漬けてもよい位だが、之れでは、取扱ひにも不便であるから、適宜土の乾き過ぎてボロ〳〵にならぬやう、目の細かな如露で日に三四回位水をやる、或は大きな水盤に砂を盛り、此の砂には絶えず濕氣を含ませて置き、其の上に鉢を置く、さすれば鉢底の孔から充分水分を吸收出來る、其上、如露で注ぐやうに分量に不同がない、尙右の砂の上には、水と共に極めて稀薄にして油糟の水に溶解したものを、混じてやるのもよい。

次には培養土である、右の如く灌水を充分にすれば從つて土も工夫してやらねばならぬ、與へた水が水拔から漏れず鉢の中に停滯して居れば、直ぐ根を傷ける腐敗せしめる、之も亦壽命を短からしめる原因となる故に鉢の土は、壤土四分に砂六分位でよい、そして水も絶えず新陳代謝して居るやうでなければ不可ない、植替も夫れと同時

に、今迄は春先一回位でよかつたが尙秋にも行ふ、土用の少し前にも行つてやる、植替は何回行つても、他の樹のやうに夫れが爲め、樹が衰弱すると云ふやうなことは、決してない、尙秋になつて、色の變つた葉が邪魔になるなど、苅つ取りては害がある、其儘にして自然に落つるのを待つ方がよい。

肥料は成るべく油糟を用ふる、動物肥料でも、普通の人造肥料でもよいが、夫れよりは油糟が一番安心して使用が出來る、之は水に溶解して施こすので、油糟一升に水三斗の割合で、混合し二三箇月置き、充分に溶解し去つた時、初めて用ゐる、濃厚なものを度數少く施すより、稀薄にしたものを度々施こす方がよい、夏は石附として愛翫する人が多いが、石附は樹木をして衰弱せしめるものであるから、灌水も肥料も、普通鉢植の夫れよりも多量にしてやる方がよい、尙、夏の觀賞期を過ぎたら、土で栽るてやれば、尙更、樹の發育をよくするものである。

竹（たけ）

竹は元來、熱帶地方原産の植物で世界に分布して居るが、日本にも、東北を除いては、各所に自生し、昔から人の生活に密接な關係を有つて居る、その一番古く現はれて居るのは、『古事記』の神代の卷の

天照大神云々、そびらに、千入の靫を負ひ亦伊都の竹鞆を取り佩き云々

といふ條である、次いで『日本書紀』にも彥火火出見命誕生の折、竹の刀を以て臍の緒を切り、その竹刀を投げすてた處に、一叢の竹林が出來たとある。

尙此の外有名なものとしては、鹽土の翁が彥火火出見命に、玄櫛を土に擲ち、五百箇の竹叢を興し、その竹で、大目麁籠を作り、命をそれに入れて龍宮城に送つてやつたといふ傳說がある竹林經營を傳說化したものらしい。

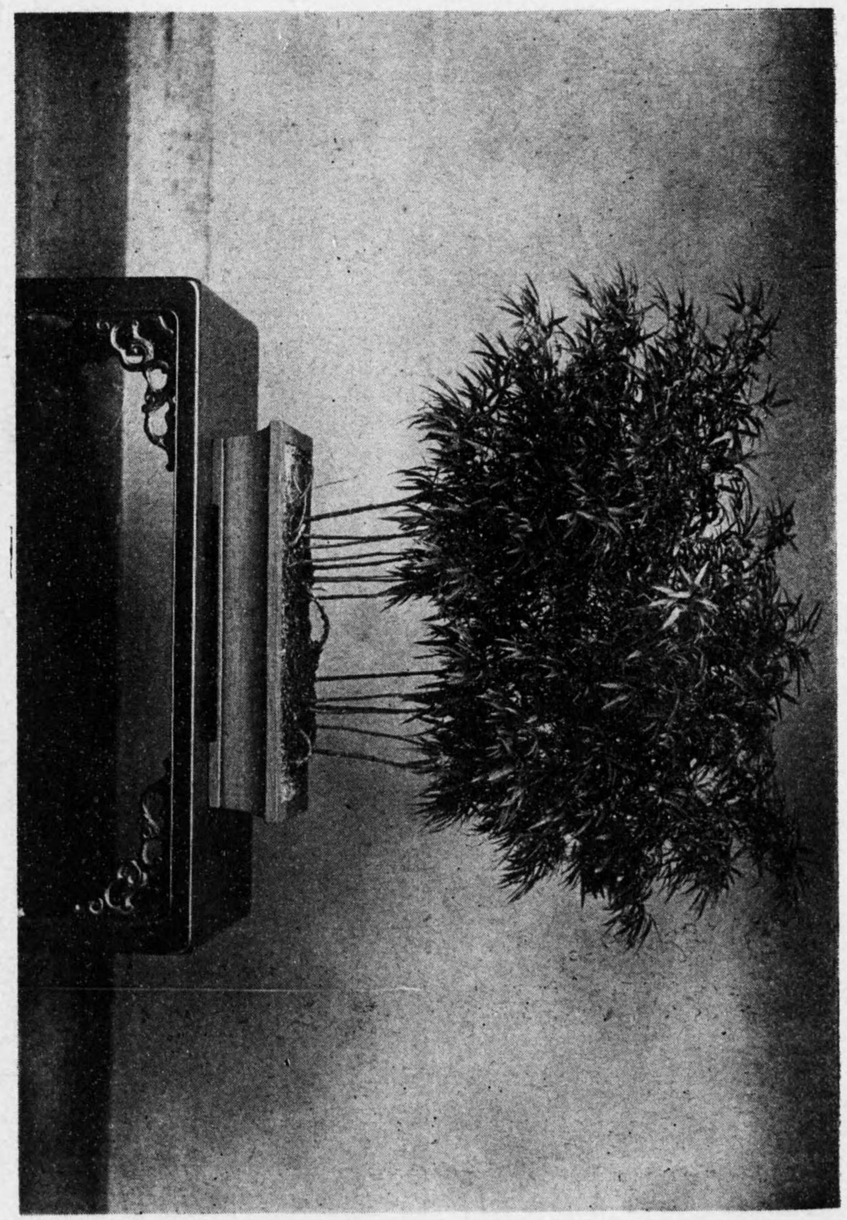
それから、尙、天孫瓊々杵尊が、初めて豐葦原瑞穗の國に降臨在し、日向國高千穗

峰に巡幸の砌、遙かに長島の竹島を欝はせられたといふことがある、竹島はいふまでもなく、當時の竹林で、竹が九州地方には、古くから自生して居たといふ立派な證據である。

竹が庭園などに栽ゑられて、人々の愛翫を受けるやうになつたのは、何の時頃からか詳かでないが、平城天皇の平安奠都頃には、立派に庭園に栽ゑられて、當時の風流人を喜ばせたのであらう、『禁腋秘鈔』には紫宸殿の條にその有樣を記してある。

石はひの間のまへに河竹のたい(臺)あり、仁壽殿の西むきのところの間には、吳竹のたい(臺)みかは水みきりを流れたり。

併し一說には、當時は今日見るやうな竹は無く、多く篠や小笹の類であつたらうと、併し之は『萬葉集』あたりの『小竹宮』『小竹祝』『小竹田』などの文字から、推測した言葉らしく、國中に竹のあつたことは爭はれぬ事實である、唯竹は暖國に產するものであるから、寒冷な土地には餘り見ることが出來ず、僅かに篠笹のみ見て居たかも



盆栽　竹林

孟宗竹（上）

竿の太き點をよく利用して画趣を深からしめた、寒竹より苦心を要する。

風知草（下）

風知草に立葉と伏葉とある、勿論伏葉を貴ぶこれは卽ち伏葉で、下のはつくばね草である。

知れぬ、俗説には『南部地方(今の奥羽地方)には全く竹を見ず』といひ、『續西遊記』にも次のやうな文が載つて居る。

暖國には、竹よく生育す、寒國は竹にあしく、信濃國には、竹一本も生せず、甚だ不自由なることなり桶の輪には、竹にあらざれば叶ひ難き故、三河尾張より輪に作りて送り來る、甚だ高直なり

とある、扨て竹はかく古くから、文學にも現はれて居るので、『萬葉集』には、種々な文字に書きあらはされて居る、『なら竹』『まゆ竹』『しぬめ刺す竹』『宇惠竹』など夫れで『延喜式』にも、『かは竹』『くれ竹』『斑竹』などがある。

梅のはな散らまくおしみわか園の竹のはやしにうくひす啼くも　讀人知らず

時わかぬおのが枯葉はつもれともいくもかはらぬにはのくれ竹　從二位家隆卿

われなれや風をわつらふしのたけはおきふしものゝ心細そくて　西行法師

○

若竹のしげる時分や五月雨　季吟
稲妻にこぼるゝ音や竹の露　蕪村
竹植ゑて寢心を人に問れ鳧　多代女

竹の種類は、その數も隨分多い、『竹譜』などに見れば、一種の竹でも種々に呼びなす外に、全然別の種類でも數十種の多きに上つて居る、以下主な種類を列擧しやう

永年竹　一名箱根寒竹と呼び、盆栽界には最も弘く愛翫されて居る、名古屋の人高岡永年翁に依つて紹介されたので此名がある。

寒竹　一名吳竹と呼び、新井白石曰く『これ昔のくれ竹ならむ』と、カンは漢の音で、吳の字と漢とを取違へ、更に寒に轉じたのである、

孟宗竹　人のよく知る所で、節に一種の雅致がある幹は太く葉細かに甚だ美しい。

鳳尾竹　一名を鳳凰竹と謂ひ、其葉が鳳凰の尾に似て居るので、此名があり幹は細く、葉も清楚である、觀音竹、土用竹とも呼ぶ。

斑竹　一名を『とらふだけ』と呼び淚竹ともいふ、延喜前後に渡來したもので、幹に斑紋がある處から此名があり、其の斑を淚痕に見立てゝ淚竹とも呼んだのである。

布袋竹　琉球竹といひ、虎攢竹の別名もあり、更に多般竹とも云ふ、根上り節細かく奇形を呈し、盆栽としても却々面白い。

沙古丹竹　別名に花斑竹、斑皮竹、研竹、豐後竹、篇竹などゝ種々ある、自生のものは、高さ大抵五六尺位になる。

大明竹　一名大名竹、幹も太く葉も廣く、雄大なもの、八九月頃筍を生ずる味甚だ美、庭園用に充てられて需用が多い。

四方竹　別名は方竹、刺竹とも呼び盆栽としては、寒竹に次ぐ、初め江戸時代に琉球產のもの渡來し、漸次流行を來したもので、毎節相距ること三四寸に及ぶ風韻に富み陳列には殊に適して居る。

紫竹　一名を紫君、別に紫苦と呼ぶ、初め籜をとく時尙青く、後に紫に變ずることがある、高さ八九尺、經四五分位氣品高雅のもの。

業平竹　一名和合竹、一名弱竹、自生のものは一文五六尺に及び毎節左右に凹處がある、姿勢優美なので此名がある。

黃金竹　漢名は金竹、此種乾燥すると鮮かな黃色を呈する光澤も美しいので此名がある日本では薩摩、琉球に產し黃皮竹とも呼ぶ。

金明竹　別に筋竹と云ひ、又『くまだけ』とも呼ぶ、節の際に一條の線があるので筋竹とも云ふ、日本在來の竹ではない。

高麗竹　『まぢだけ』又は金絲竹とも白絲竹とも呼ぶ、高さ四五尺、太さは漸く小指位、矢などに使用される、日本では九州に多く見る。

佛面竹　一名佛肚竹、又佛眼竹、鬼面竹ともいふ、竹の中で極めて稀品である、日本では、往昔伊豫に存した事があると。

鶴膝竹　鼓槌竹又は木槌竹の別名がある、同じく稀品として尊重され、今は絶えて培養するものが無い、鶴膝の名は節の形狀から命ぜられたものである。

高節竹　節竹と稱へ、俗に『こぶだけ』と呼ぶ、漢名は暴竹で、德川時代に渡來し、播摩の國に移植したが、其後根絶したといふ。

毬竹　孟宗竹の一種である、其節の形狀を、人工を以て毬のやうに圓くしたものであるが、今日は餘り見ない。

羅漢杖竹　節の邊が奇形を呈し、佛面、鶴膝のやうに模樣がある、幹は曲つて龍の如しといふ。

臺明竹　一名大妙竹、音葉笛竹、二葉竹とも稱へ、大隅國から產出する、天智天皇の御宇始めて此竹を伐り笛を造らせ給ふたので代々笛に用ゐられる、漢名四季竹と呼ぶ。

南京竹　一名慈竹、老竹、其他數多の異名がある、鳳尾竹の一種で、叢生數十百

幹に及び、一年二度筍を生じ、夏竹は中に發して外に讓り、冬竹は外に發して中に讓るといふ。

小町竹　漢名は蕩竹と稱へ、琉球では麻平古竹と呼び業平竹に對して、此名がある、姿勢甚だ優美なので女竹とも稱せられる。

實竹　一名實中竹、實心竹とも呼ぶ、和漢共に產するが陸前松島の中、竹島に產するものが有名である。

玳瑁竹　駿河國藤川の傍、木島鄕には往昔玳瑁竹があつたといふ、幹に斑紋があり極めて大きいので此名がある、或は曰ふ此竹幹の色暗紫色、斑紋更に無いと。

苦竹　其丈八九尺に至り、幹より以上は每節双枝の間から、別に小枝を出す、普通の眞竹と同じであるが、葉の傍に褐色の毛がある。

翁竹　漢名は間道竹、苦竹に似て高さ一丈餘に至り、幹の太さ圍み四五寸位になる。

疎節竹　其節の間極めて長いので、笛の製造に用ゐられ此名がある、昔は筑後柳川に此種多く產出したといふ。

金華山　陸前國金華山から產出する笹で、其葉細かく光澤あり、雅致深く盆栽界に珍重されて居る。

小隈笹　金華山に次いで弘く行はれ、葉に小さき斑紋があり夏の鑑賞に適して居る、笹には此外に『根笹』『露笹』『函根野笹』『おろ島笹』がある。

さて竹の種類はかく澤山あるが、此中盆栽として愛翫されて居るのは『永年竹』『寒竹』『鳳尾竹』『四方竹』『大明竹』『斑竹』『孟宗竹』『紫竹』『苦竹』『沙古丹竹』位のもので、笹は上記のものに限つて居る、之を盆栽として美しく眺めやうとするには、中々細かい注意を要する、初め先づ植替から說明しやう、『俳諧歲時記』には『竹植』と云ふ題があつて、舊曆五月十三日になつて居る、併し眞に竹の植替に適する時期は四

五月の頃である、殊に竹は普通の盆栽と違つて、年に二回の植替を要する、一回でもよいが二回行つてやれば結果が甚だ良好である。先づ四五月頃に一旦植替へ、更に八月の下旬に植替へてやる此の場合は撞木根を殘し、他は盡く除き去る、开して肥料を充分に施してやる、肥料は油糟が一番弘く用ゐられて居るが人に依つて違ふ、故大谷光瑩伯の如きは、牛肉を煎た汁を用ゐて好結果を得て居た、併しこれは費用の點からいうても全部にすゝめることは出來ない、分量は多過ぎても差支なく、不足だと却つて害蟲がつき易い、鰊も肥料としては輕便でよい、之は細かに截つて鉢底へ埋めてやる培養土は眞土に砂を加へたものが第一である。

次に注意すべきことは害蟲の襲來で、是には置場も關係があるから、充分空氣の流通する場所を撰び、棚を設けて置く、日光浴は午前十時頃までとし、十時頃からは日蔭へ取入れる、害蟲の種類は、大概貝殼蟲で節の袴や葉の裏へ巣喰ふのである、見附け次第に取除き、時々根元を輕く握つて、上へ扱き上げる、かうすれば葉裏の蟲も大概取れてしまふ。

姿勢の作り方は人各々趣味も異り、意見も違ふのであるが、既に幹の揃つたものは、成るべく筍を出さぬやうにし、新らしく作る時は豫め幹の數を定め、夫れ丈け筍を育てゝ行く、少し伸びたら下の皮を一枚剝ぎ、更に伸びたら又一枚を剝ぐ、かうすれば節の間が短かくなつて雅致が一層增して來る、幹の光澤を美しく見せるには、時々香油を滲ませた布で拭き上げてやる、かうすれば殊に美しくなるものである。

蘆（あし）

蘆といひ、葭といひ、萩といふ、文字に書いてこそ違へ皆同じ草の名である、蘆の語源は『阿之』で『青之』といふ詞から轉じ、葭は其の柔かな綠葉が、風に搖れてそよぐ風情が、如何にも弱々しい處から、『よわし』といふ詞が變化したのであるといふ、然しながら盆栽界では、蘆と萩とは整然と區別して居る、『本草綱目』に依ると、蘆の若

い中が葭で、大きくなつてからが荻と唱へるやうにも記してある、盆栽界での區分も或は之に依つたものではあるまいかと思はれる。

蘆は日本固有の禾本科植物で、その名の最も古く現はれたのは『古事記』神代の卷、第一頁の天地初發の條に

次に國稚く、浮脂の如く、海月如す漂へる時に、葦牙の如く、萌騰るものに因つて、成りませる神の御名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神　云々

ある、此處に葦牙と說されたのが始めで、葦牙とは葦の生ひ初めたことをいふのであるから、其頃既に蘆と云ふ名稱の存して居たことがわかる、『萬葉集』にも數首の蘆の歌がある。

湖あしにまじれる草の知りぐさの人みな知りぬ吾がしたおもひ

神風の伊勢のはま荻折り伏せて旅寢やすらむあらきはま邊に

此外に蘆を詠じた詩歌は、擧げて數ふべからずで、『山家集』には

露のぼるあしのわか葉に月さえて秋をあらそふ灘波江のうら

灘波江の入江の蘆にしも冴えてうらかぜ寒きあさぼらけかな

と詠じ、『百人一首』には

灘波江のあしのかり寢のひと夜ゆゑ身をつくしても戀わたるべき　皇嘉門院別當

灘波がたみぢかき蘆のふしの間もあはでこの世を過してよとや　伊勢

の二首が洽く人口に膾炙せられて居る、俳句には『荻の聲』に名句が多い

秋かぜの定宿なれや荻の聲　貞德

あかつきの日和になりぬ荻の聲　蓼太

月今宵荻もおとせよ荻も散れ　大江丸

蘆は盆栽としても、夏の觀賞植物中、殊に重きをなすもので、簾を動かす夕風に、柔かい葉を搖がす風情、朝な朝な葉末に銀色の露を宿す姿、一度其の清楚な姿に接し

たならば、忽ち三伏の炎暑も忘れはてゝ、涼風坐ろに腋下に起る思がするであらう、蘆の中でも、『西湖の蘆』は、其昔風流人が態々支那の西湖から携へ歸り、之を盆裡に仕立てゝ、文人風の粹を見せたのが始めで、以來蘆とさへいへば直ぐに西湖の蘆を聯想するやうになつた、此の蘆の特長ともいふべきは、莖から葉、根元に至るまで、如何にも繪畫的趣味の饒かな點で、細莖間々淡紅を帶び、所々枝を打つて翠葉を捧げ、葉は片葉となつて詩趣横溢、眞に蘆の中でも優品である。

蘆の培養法は、先づ春三月から四月の半頃となつて、鉢の底に太い根が出るから、之を初めに切り除けて、砂と油糟とを混合した培養土を作り、植替を行つてやる、油糟は十分に施してよい、植替が終つてからは、絶えず其手入に忙殺されるが、新芽の出るのを待ち、出たら嫩葉を四枚殘し、他は其の袴とともに剝ぎ去つてしまう、开で又節から新らしい枝を打つて嫩葉を出す、夫れを四枚殘して袴ごと取り去る、かうして其の手入を重ねて行く中には、莖も細くなり、丈は餘り伸びずに枝を生じて、姿勢が整つて來る。

植替が終つてから、肥料を充分に與へることは、既に述べた通り、之を納める鉢は成るべく薄いものを用ゐ、置場所を一定し、絶えず一方のみ日光に浴せしめる、之はその姿勢を作る際、片葉に育てゝ繪畫に見るやうな、優美な姿を呈するやう仕立る爲めである、元來草といふも水中に生育するものであるから、灌水には充分注意し夏は勿論のこと、冬の中でも決して灌水を怠ることが出來ない、怠れば其根を傷け、葉を弱らせ遂には大害を釀すに至る注意すべきことである。

風知草（ふうちさう）

風知草も、夏、その水々した青葉を眺める盆栽である、一名『かざしりぐさ』又は『かぜぐさ』と呼び、禾本科に屬する可憐な草である。漢名『風知草』と呼んで居る、夏の鑑賞盆栽としては、極めて瀟洒なもので、緑葉の風に嬲られて搖れる姿は、能く他

の盆栽と調和して、陳列上一段の妙味を添へる、此の草の名稱に就いては、次のやうな説がある。

元來禾本科の植物には、並行脈の外に、横に一ヶ所皺が出來て居る、此の皺は園藝上『食締め』と稱せられて居るが、風知草には此の『食締め』一枚の葉に十二あるといふ、そして風の吹く度に其葉が搖れる、支那では此の葉の動く姿を見、その喰締を數へて風の强弱を知るといふ所から此の名がある。

その觀賞時期は、勿論夏が第一であるが、秋になると極めて質素な穗を現はす、美しいものではないが、淡綠の色、楚々として人の心を動かすものがある、此穗は昔から茶人風流人の間には、中々愛翫されたもので、態々穗の出るのを待つて、茶室に陳列したり、小さな瓶に挿花としたりして、脫俗的な味を樂しんだものである、然し一般的でないから、他の草ほど廣く愛翫されて居らぬ。

産地は全國の山林原野、到る所自生のものを見る、然し之を盆の中に移して、益々美しくなるのは支那の風知草である、然し今日では少くなつたので、日本の風知草が分布して居るが、産地は箱根を第一とする、箱根山の産は、葉色鮮綠、莖細く、密生して居るから、甚だ美くしい、盆栽界では、此の風知草を又二つに區別して居る、一は伏葉といふて、莖細く柔かに、密生すれば鉢の外廓に向つて伏す、一は立葉と稱へ、莖もやゝ太く、立つ性質がある、盆栽としては勿論伏葉の方が優美である。

風知草の培養法は、其の初めに於いて、油糟を稀薄にした肥料を充分に施して、發育を助け、春の初めになつて未だ新らしい葉を生じない前に、一度其の莖を殘らず刈り取つてしまう、何故に芽も吹かぬ時から、莖を刈るかといふと、風知草は非常に芽を發することが迅速なので、發芽してからでは、迚も容易に刈り込むことが出來ない所で、其の前に一度刈込で置くのである。

苅込が濟むと、直ぐに青い芽が現はれる、今度は少し伸びるのを待ち、葉が開いた所で、上葉を三枚殘し、莖の袴を叮嚀に剝ぎ取る、注意しないと莖を傷めるから、細

い鋏か、ピンセットでも用ゐる方が輕便である、かうして細かい點まで注意しながら、手入をして往けば、草の形も漸次整ひ、莖の光澤も美しくなつて、夏の鑑賞期には恰度よくなる、陳列には圓柏や松類などの常盤木に配しても面白いが、石榴などに配して下草の趣を見せるのも趣味の深いものである。

風知草や、蘆の外に、此種のものでは『臺灣荻』がある葉は白味を帶びて濶く、尖り鋭くして面白く、『蓋草』や『鴨の嘴』は夏から秋にかけて趣味頗る深く、『雀萱』は紅葉が詩味饒かである、『書帶草』は黑髮にも粉ふ細葉長く伸びて、風に梳られる姿、瀟洒を極め、昔は此葉を以て文筥を結んだといふのでかうした風流な名がついて居る、草物としては特色のある面白いものである。

木賊（とくさ）

形からいへば、木賊は唯、直線の集まりに過ぎない、それで居て、何となく淸々しい、涼しい感じを與へるので、近來、一部の盆栽家には、非常に此の草の培養が流行して來た、此の木賊は木賊科といふ一科を成して居り多く山麓の溪谷や、沼澤に近い濕地に自生して居る、自然生のものは、其高さ二尺位に達し一所から多數簇生し莖は極く鮮かな綠色で、枝といふものは無く、一寸五分乃至二寸、で一節を作り、節には黑い袴が附いて居る、學者の說に依ると此の袴は、葉の退化したものであるとの事、莖には縱に無數の細かい溝が出來て居り、其質が固く、乾燥せしめて、物を砥ぐに用ゐられること人の知る通り、九月頃になると土筆に似た穗をつける。

『とくさ』といふのは、砥草である、即ち物を砥ぐ草で、よく此の草に兎を配つてあるには、兎が初めて此の草で齒を砥いたといふ傳說があるからで、莖の固いのは硅酸を含んで居るからである。

木賊は、大概の處の沼澤濕地に自生して居る、併し信濃國と丹波國とが古來最も名高く、信濃國園原は歌にまで詠ぜられて居る、源仲正の

木賊かるその原山の木の間よりみがき出でぬる秋の夜の月

などとあるし、小大君の家集の中にも『きのふつかひしとくさの蔀の前に落ちて露のかゝりけるを、あしたに人の取りあげたりければ』と題して、

しなの野の木賊の上におく露のみがける玉と見えにけるかな

などいふ優しい歌もある、夏の盆栽として、萬人に愛せられるのも誠に理由のあることで謡曲の『木賊』などは、矢張此の草に趣味を添へることの深いものである。

普通盆栽として鑑賞せらるゝ木賊には、三つの種類がある、即ち普通種と、姫木賊(ひめとくさ)、水木賊(みづとくさ)である、姫木賊と呼ぶのは、普通の木賊よりは丈けも遙かに短かければ、細さも細く、總じて株も小さい、夫れ故、盆栽として、水盤の中に仕立てるには、此の方が風情がある、水木賊は水澤の中に生ずるので、水を好む點では他種に勝り形も幾分小形である、盆栽にも姫木賊に次いで多く用ゐられて居る、茶庭や路次庭などに植ゑるのは、姫木賊や水木賊は適せず、之は矢張普通種の方がよい。

扨て木賊を盆栽に仕立てる方法であるが、先づ野邊から、木賊を採集し來り、よく根を纏めて、ケト土で適當な大さの水盤の中に栽ゑつけ、周圍には細かい砂を入れ、其の砂のかくれる位、水を湛へて置く、初めは、半日位日光に浴せしめ、炎天の際には日蔭へ取込んでやる、肥料としては、極く稀薄な油糟がよく、時々施してやる。

形を作るには、餘り其儘にして置くと丈けばかり伸びて無趣味になるから、程よく調和も取り、長過ぎたものは一節か二節取つてやり、餘り短かいのは心もち伸ばすやうにする、理想としては、長短程よく笠のやうな形となるのがよいので、皆同じ長さにするなどは智の無い仕立方である。

水はなるべく潤澤に施す。不足だと直ぐ黄色になるから注意する必要がある。

此の草には、蟲害といふものが無い、夫れ丈け培養も容易である、唯水の注意丈けは怠ることは出來ない。

水盤は南京か高麗などが調和する、色は白がよく他の色は餘り涼しい感じがせぬものである。

合歡（ごうくわん）

合歡は俗にいふ『ねむのき』である、初夏の觀賞盆栽として、筆の穗先を紅に染めさつと散らしたやうな涼しい花、細い葉柄に形正しい鮮綠の複葉、何れも合歡の趣味を一層深くするもので、氣品もあれば、餘韻もある、普通の盆栽とは何處にか變つた味ひがあつて、古來雅人の愛翫するところとなつて居る、花は七月の半ばから咲き初めて、下枝から上枝と代る代る咲いて行き、夕方になると可憐な小葉は自から、合はせ閉ぢて夜の露を避ける、合歡を『ねむの木』と稱するのは、此の葉の運動から來たのである、尙『本草綱目』は合歡の形態に就いて記して曰く

合歡木は梧桐に似たり、枝甚だ柔弱、葉は皂莢及び槐に似て、極めて細く、而して繁密、互に相交る、一風來る毎に、輙ち自ら相解く、（中略）五月花開く、その花上半白、下半肉紅、散垂して絲の如く花の異となす、その綠葉夜に至つて則ち合ふ。

とある、合歡の字義は、此樹を庭園に植ゑる時は、一家能く和合し、人として怒を除かしめる、即ち『歡び合ふ』といふ所から、此名があり、其葉の夜合ふ處からは『合昏』『夜合』と云ひ、別に『青裳』『萠葛』『烏賴樹』の名があり、佛經には『尸利灑樹』とある、日本では『ねむ』『ねむた』『ねむり木』などゝ呼び、合歡を轉訛して『がうかの木』とも稱して居る、大和國多武峯は、古來合歡の名所として、其名夙に現はれ、武州綾瀨川も關東に於ける、合歡の名所として、幾多の詩人墨客が詩囊を肥やして居た。

扨て合歡は何時の頃から、人々に愛翫せらるゝやうになつたか詳かではないが、『萬葉集』の第八卷には、紀女郎が大伴宿禰家持に贈つた歌がある

ひるは咲き夜は戀ひぬるねむの花われのみ見むやわけさへに見よ

家持が之に答へて

わぎもこがかたみのねむは花のみに咲きてけだしく實にならじかも

尙『萬葉集』の拾壹卷にも

わぎもこそ聞き都賀野邊の靡きねむわれはしぬばず間なく思へば

此外に合歡を歌ふた歌には

我妹子にかくとばかりは告やらむかたみのがうか花咲きにけり　正三位知家卿

よにたえぬ大內山のかたなしにふるきがうかの木すえをぞ見る　信實朝臣

秋といへば長き夜あかすねふの木もねられぬほどにすめる月哉　民部卿爲家

何れも讀みもて行く中、坐ろに合歡の花が眼のまへに現はれるやうな感がある、俳句にも名吟が中々ある。

象潟や雨に西施がねふの花　芭蕉

蝮の鼾も合歡の葉かげかな　蕪村

合歡園女

黃金にて鑄つべき顏や合歡の花

普通日本の山野に自生して居る合歡には、其花に濃いのと、淡いのと二種類ある、何れも夫々特色があつて美くしいもの、外國から渡來した種類には、『緋合歡』がある。花の色眞紅、美しい事は美しいが、本邦產の淸楚に如かぬ、『金合歡』や『銀合歡』も小形の可憐な花を着けて美くしい、『蔓合歡』は直徑五分程な、毬形をした美事な花を開く、稀品として價も甚だ高い、懸崖にして壽老の盆にで栽ゑれば、夏季の盆栽中出色のものである。

培養法は春先、芽の出る前に一回植替を行うてやる、花が咲いてからは、決して植替は出來ない、初夏の候になると此樹には、殊に幹や枝へかけて黑い蚜蟲がつく、之は直ちに驅除せぬと、大害を釀すやうなことゝなる、最も輕便で無害な驅除法は、前に記した通り豆腐の湯を取り、よく冷まし、これで洗つてやる、後で淸水で洗ひ落せば、樹には更に影響を及ぼさない、肥料は油粕を三十倍位にして、時々施してやれば、

幹にも古色を帶びて來る。

舶來の緋合歡や金合歡、銀合歡などは、冬季の持込が困難であるから、充分注意しなければならぬ、先づ温室へ入れて、華氏七八十度位の温度を保たせる、若し冬の中に寒氣に合せると忽ち枯死するやうなことになる。

百日紅（ひやくじつこう）

百日紅は、一名『猿すべり』と呼ぶ、夏梢に燃えるやうな緋色の花を開き、幹の滑らかな肌と、愛嬌のある葉が、中々面白い、紅ばかりでなく、紫を含んだのもあれば、白もある、殊にその花瓣を見ると、紅の薄葉を千鳥に刻んでつけやうで、他に見られぬ面白味がある。

支那では此の花を『紫薇』といひ。又別に『怕痒樹』とも呼び『頽桐』といふ別名もある。多少支那でも、文人墨客の賞翫を受けたらしく、『汝南圃史』といふ書には

百日紅（上）
斜めに伸びた幹は此の木の特長である、肌の滑澤もよく見せ枝配りも相應に苦心してある。

梨（下）
懸崖で、累々たる果實を結んで居る、根張に一層の古色があれば、殆んど間然する処がない。

薇花五月中花開き、六七月に至る、爛漫愛すべし、又百日紅といふとある、所が日本では此花不遇にして、詩人墨客の一瞥さへ得ること少く、之を詠じて其花の美を賞したものなど極めて稀である、唯其の『猿なめり』と稱する名が、多少好奇心を惹いたのみで、『夫木集』にも、民部卿爲家が貞應二年に讀んだ『百首木』の一に其名を見るばかりである。

足引の山のかげ地のさるなめりすべらかにても世をわたらばや

俳句にも餘り有名なのは無い

百日紅寺中大かた見えにけり　太祇

醬油蒸す軒のけむりや百日紅　完來

咲まさる百日紅に照る日かな　百明

百日紅毎日散つてさかんなり　習先

てらてらと百日紅のひでり哉　子西

百日紅には其種類三種ある、普通紅一種のやうであるが、紅の外に白も紫もある、白薇、紫薇、紅薇が夫れである、其の開花期百日に及び、絶えず艶麗な姿を呈して居るのは、此花の趣味深い所で、『水滸傳』の石秀楊雄が家の所には

自古道人無千日好花百日紅

とある、盆栽としては、花よりも樹の姿勢に重きを置くこと勿論で、整つた樹ならば、開花すると實に美觀を極める、唯松柏や梅や石榴のやうに、良い樹の少いのが缺點である、盆栽としての培養法は、春の彼岸前後、華氏の温度四十五度内外の交、植替を一回行ふてやる、恰度新芽が出かけた位で、是より以前では、寒氣の爲め發芽が遲れることがある、暖かい地を好む樹木であるから、培養も矢張其心得が肝腎である、植替が終つてからは、土用前に一度新芽を摘み取つてやる、其後は充分に肥料を施して發育を助ける、かくする中漸く開花の時期に近くから、朝は成るべく早くから、適度に灌水してやる、分量は如何に多量でも、水拔がよければ決して樹を損じるやうなことはない、置場所は日光の強く當る所を選び十分に浴せしめる、日蔭に置けば樹の發育を鈍らせてしまう。

肥料は人に依つて説もあるが、從來の經驗上、最も簡便で結果の良好なのは、鰊、乾鰮、油糟の類で、鰊なら五六分に截つて鉢底に埋めてやる、油糟は粉末の儘鉢の上へ散布してよい、初夏黑い蚜蟲が附き易く、其儘放棄して置くと蟻を導いて樹を害ふから、豆腐の湯を冶まして柔かい楊枝で洗ひ、後清水で洗ひ清めて置く、かうして持込んで行く中には、漸次褐色の幹に光澤が增し、花附もよくなつて、愈々趣味の深くなるものである。

石榴（せきりう）

春は芽先の美、夏は美しい花、秋は洒脫な果實の趣味、冬は落葉後の寒樹の姿と、四季その趣きをかへて、人に親しまれて居るのは、今の盆栽樹木中石榴に及ぶものは

あるまい、誠に今日の流行を致して居るのも、理由のないことではない。

扨て此の石榴は日本固有の植物では無く、支那から渡來した植物である、然し其の渡來した時代は物の書にも之を傳へるものがないので、詳ではないが醍醐天皇の延喜年中、大醫博士深江輔仁が撰にかゝる『本草和名』には、既に安石榴の名を存し、圓融天皇の永觀二年鍼博士丹波介康頼が撰に成る『醫心方』にも、石榴の果實に就いて記す所がある、之恐らくは、本邦の書籍に石榴の記された嚆矢であらう。

石榴は元來、『安石榴花』と呼んだのであつたが、何時しか、安の字は除かれ、花の字は略されて、石榴となり、石榴は更に一轉訛して『ざくろ』となつた。異名別名頗る多く、陳扶搖が『秘傳花鏡』には『石榴』『火石榴』の二種名を記し、『群芳譜』には『富陽榴』『海榴』『黄榴』『河陰榴』『四季榴』『餅子榴』『番花榴』などの異名を載せて居る。

傳説に據れば、西漢の孝武帝が元狩元年、博望侯張騫、西域匈奴に使し、歸途塗林安石國を過ぎ、折柄咲き競ふ榴花を見、奠賞措かず、其種子を齎し歸つて之を孝武帝に

石榴二態
上　錦袍榴
下　樺一重

錦袍榴は一幹よく四種の花を開く、花は優れた特長を有するもの、此の木姿勢亦佳。
樺一重は花色溫雅此の木よくそれに伴ふ。

献じた、安石榴花の名は之より出たといふ、眞僞は暫く措き、石榴は暖帶地方の產で、現に南淸地方には野生の石榴も却々多いとの事だ。

石榴の變種が數多渡來したのは、德川時代になつてからで、長崎には二百年以前既に石榴を移殖して居たといひ、江戸に渡つたのは元祿の前後で、一時は中々流行を極めたといふ、其後享保九年になつて、朝鮮石榴即ち現今の姫石榴が武州に入つた、之に就き、江戸染井の花戸伊藤伊兵衞は、其著『地錦抄』に『大和本草』を引證して

『大和本草』に『朝鮮ざくろ』とあり、夏より冬まで月を逐ふて花咲くと云へり、西國邊には前々より有りし由なり、小木にて花多く咲き、實のる眺めよし。

白井光太郎博士の『日本博物學年表』にも享保九年の條に

南京石榴たうかへで輸入す

とある、南京石榴は、思ふに天津石榴のことでは無からうか、天津石榴は即ち現今の大實で當時盛んに流布された形跡がある、最も當時は果實を藥用に供した餘焰で、一

部の風流人が之を愛翫したものである。

支那では古くから榴花を愛翫し、能く詩人文士の詩題に上り、王安石は石榴の美花を賞して『萬綠叢中紅一點』の名句を遺し、閩人翁榴庵は『花暦百詠』の中に、幾多の名詩を載せて居り、口碑や傳説にも面白いのがある、陳列鑑賞の上の參考に一二つ記して見やう。

唐の永泰中、閩縣に藍超と呼ぶ樵夫があつた、或日の事例の如く、深山に木を伐りに往き、其歸途不圖一頭の鹿に遭つた、此鹿毛が悉く雪白で世にも不思議な姿なので、藍超は之を生捕らうと、鹿の後を遂ひながら、とある川を渡つた、すると忽ち立派な石の門の前に出た、見れば門の中には、人家もある、鷄や犬の聲もする、餘りの不思議に身の周圍を見廻はすと、白鹿の姿は見えず、今を盛りに咲き競ふ、焔のやうな石榴の花の傍に、神々しい老翁が一人立つて居た、驚いて歸らうとすると、老翁は藍超を呼びとめ、傍の榴花を一枝折つて與へた、藍超は夢心地に花を受取り、不圖我に返ると、身は依然道の邊の樹の切株に腰を下して眠つて居た、之は有名な『榴花洞』の故事である。

次は崖州に榴花を非常に好む一婦人があつた、或る日庭前の榴花一枝を手折り、之を釜の中に挿しては眺めて居た、日を經て釜中の水を觀ると、何時しか夫れが酒に變つて、味も匂も殊によく、恍として人を醉はしめた、『榴花の酒』と云ふことは是が始めである。

扨て石榴の種類は、大別すれば單瓣に重瓣の二種で、果實にも白と紅とがある、然し之が園藝的種類は年々多數になつて、今日では細別して五十餘種類となつて居る、重な種類から其の花及果實の特長を記して見やう。

青山旭榴　芽出しは綠色で、其蕚は淺綠、花瓣は眞紅の單瓣大輪、此種元武州尾間木篠原房次郎翁の愛樹で、苦香園主人の命名したもの、石榴中では殊に稀品である。

曙石榴　芽出しは紅色、後緑葉となる、花の色淡紅曙色、もと三上悟風氏の命名されたもの。

姫の雪　關西地方ではもと『白鷹』と呼んで居た、花は雪白小輪、四季咲で、芽出しは鮮緑。

入日の海　舊名『小町』芽出しは淡紅色を帶び漸次緑となる、花は蕚も瓣も淡紅色、小輪で雅致深く、間姫の實生から變化したもの。

朝霞　舊名團子坂實生と呼んだ、芽出は紅色で後に緑となり、花の色は朱の如く鮮かで單瓣の中輪、蕚も淡紅色。

東明　花は淡紅色、花品清楚、氣品高雅な點は石榴中第一等、芽出しはやや黄金色を帶び後、光澤美しい緑に返る、小輪四季咲。

鹿の子　『姫』の實生から變化したもの、芽出しから葉に斑が入つて鹿子染のやうなので此名がある、花は紅の單瓣、大葉小葉の二種ある。

緋鹿の子　芽出しは薄紅に斑を現はし、後は緑葉となる、花は大輪で緋色の重瓣、艶麗無比新らしい變種で石榴中最高の位置を占めて居る。

五彩榴　『錦袍榴』から變化したもの、芽先は赤もあれば緑もある。花も濃紅、淡紅、絞、白、蕚色染分と五種の花、一幹から咲く、艶麗なもの。

錦袍榴　芽出し同じく、紅色と緑色、花は染分、絞紅白の四種一幹から出る、何れも大輪の重瓣で、『五彩榴』より一種少い。

樺後絞　葉は柳の如く細く光澤がある、園藝界では此種の葉を柳葉と稱する、花は淡紅色で散際に白く絞る、後絞と同じ變り方である。

青芽の錦　芽出は白味を帶び、紅の筋が入つて居る、花は蕚が淡緑色、細い紅の筋が入つてゐる。

後の錦　芽出しは紅色、後緑葉となる、花は頗る大輪で、瓣が深紅散際に絞となること後絞より深いので此名がある。大葉小葉の二種。

緋の司　芽出しは黄金色、後緑葉に返り、花の色は緋色の極く大輪、眼覺むるやうに美しい。

花車　『緋鹿の子』と共に數年前現はれた新種である、芽出は紅色で、緑葉となり、葉の出方が身座になるので、此名がある、花は朱色の重瓣極めて大輪である。

葉紫　姫、大葉、中葉の三種ある、芽出は淡紅色で後稍黒味を帶びて來る、花は單瓣大輪で色は紅、此中姫葉紫が一番優れてゐる。

姫水晶　普通の『水晶』に比し葉花共に小形、實は白色透明氷晶のやうなので此名がある、花は小輪純白、單瓣。

姫樺　芽出しは黄金色、後には緑葉となる、花は樺色の小輪單瓣で清楚を以て優る。

姫石榴　舊名『朝鮮』芽出しは紅色で、後に緑葉となり花は濃紅、花葉共に小形、花には單瓣重瓣の二種があり、重瓣の方は『姫八重』といひ、普通の姫にも大葉、柳葉、丸葉の三種がある。

後絞　芽出しは紅色、後は緑葉となる、花は濃紅の極大輪、散際に白く絞るので此名がある、葉には丸葉、柳葉の二種がある。

朝日榴　芽出し紅色を帶び、花は重瓣の大輪、艶麗極まるもの、葉には大葉、小葉の二種ある。

樺八重　芽出しは黄金色で、氣品高く、後には鮮緑となる、花は樺色重瓣の大輪で、雅致頗る深い、大葉柳葉小葉の三種ある。

樺一重　芽出し黄金色を帶び、後に緑葉となること『樺八重』に同じ、唯花が樺色の單瓣である、八重と同じく大葉、柳葉、小葉がある。

地球榴　舊名『天津石榴』大實の一種で葉は柳葉、花は紅の單瓣で、實殊に大きく秋季果實の觀賞に適す。

大實水晶　葉の色鮮綠、花は大輪單瓣色は純白で。其實大きく透明、水晶のやうである。

水晶石榴　花の色純白、從つて果實亦白色透明、大葉、柳葉、丸葉の三種ある。

更紗石榴　芽出しは紅色を帶び、後には綠となる、花は深く絞り、大輪の重瓣、別に俗名天絞と稱せられる單瓣もある、大葉、中葉、小葉の三種類ある。

白獅子　舊名『白八重』と呼び、鮮綠の葉は大葉小葉柳葉、圓葉と區別され、花は名の如く純白の重瓣である。

大實石榴　大實には七種類ある、大葉、小葉、甘味、酸味、丸葉、柳葉、錦性で、花は總て濃紅の大輪單瓣で、果實大きく、錦性は一名荒皮性と稱へ、幹の層疎にして古色を帶び、最も雅致が深い。

以上の種類は最近發行の『石榴銘鑑』に據つたもので、此外に、更紗から變化した『緋龍の舞』水晶の別種で『雪山』などゝ稱する、類もある種年々變種の數は增加するから二三年の中には夥しい數に登るであらう。

石榴の培養法は、先づ培養土から研究を始める、土は俗稱『あらきだ土』と稱する、田の底の土と溝土とを半分宛よく混和し、之に三分程砂を加へる、砂は天神川でも、普通の川砂でもよい、鉢の底へは篩に懸けた粗い土を入れ、充分水拔と空氣の流通を好くする。

植替は、三月の下旬から四月にかけて、發芽の頃を撰むがよい、餘りに早過ぎると、發芽が遲れるから、枝先に芽が少し出た位の頃合が最も適當である、若し其時機を過ると、唯に發芽の遲速に關係するばかりでなく、枯死せしめるやうなことが無いでもない、發芽後、植替が首尾よく濟めば、土用の明けるまでは、如何に取扱つたからとて、さして危險もない、從つて此期節中よく時を見て、植替洩れした樹などに充分手入をしてやるがよい。

肥料は最も潤澤に施す、先づ油糟を極く稀薄に水に溶解し、之を毎日若しくは隔日

位に與へるので、かうして成育を助けてやれば、芽は春から秋にかけて、間斷無く發し、幹の膚も漸次古色を帶びて、一年後には殆んど別物のやうに良くなる、肥料を斯く充分に施す時は、夫れに應じて水も充分に施してやる、一度灌水を忘れて、甚だしく乾かしてしまうと、葉は漸次萎れて來て、根も發育が鈍り、甚だしい時は之が爲め枯死するやうなことになる、だから植替の際水拔をよくし、根腐れなどにならぬやうに見てやらねばならぬのである。

次には灌水の注意である、既に述べたやうに、肥料を充分施す時は、成るべく水を充分にしてやる、元來石榴は甚だ水を好む樹であるから、多少其の量が過ぎても害にはならぬが、水拔が惡くて、絶えず水に土が濕つて居るやうでは、却つて害がある、殊に夏の眞中に、暑い日光浴を受け、土が熱くなる時は、石榴の根も非常に勢よく發育する時であるから、其の場合無暗に冷水を灌いでやるなどは、決して結果がよくない、先づ灌水は毎日三回を限度とし、汲み立ての水よりも、汲置きの水の多少温くなつた頃施す方がよい。

芽の摘み込みは、初め發芽の頃、二葉ばかり摘んでやり、出るに從つて樹の姿勢をよく考へ、不用の芽は摘み有望な芽は殘し、伸び過ぎぬやう注意しながら、育てゝ行く、其中には枝にも漸次力が附いて來るし、幹もだんだん肥えて來る、枝や幹を矯めの姿勢を作ろのは、入梅の時期が一番適當である、併し芽が出て固まれば何時でもよいので、針金は必らず銅を用ひ、適宜に直してやる、唯秋の落葉後は避けなければならない、日光浴は充分にし、夏の眞中だとて、決して簀下へ入れる必要はない、樹の姿勢を作る時は、餘り花を多く附けぬやうにする、若し花を澤山開かせれば、從つて樹に疲れが來るから、蕾の中に未練なく取除くがよい。

果實は秋になつて、充分熟させて眺める時は、えもいはれぬ雅致がある、若し永く枝に留めて置きたい場合には、果實の附着して居る枝の皮を剝いでやれば、永く枝に留まるものである、元來暖帶の植物であるから暖いのは差支ないが、寒氣にあはせる

と、傷むから、冬中は窖へ入れて、春先に出す、姫石榴は殊に寒氣を怖るから注意が肝要である。

芭蕉（ばせを）

明治の初年に流行した、文人風の面影を忍ばせる盆栽は、今では芭蕉などが、その代表的のものとなつてしまつた、鮮かな綠の葉、蘊々たるその姿、殊に若い中は卷葉の面白味など、一寸他の盆栽に類がない、水盤にでも收めて伊豫簾でも廻らすと、亦格別である。

芭蕉は元來暖國の植物であるから、本邦では琉球に多く產し、薩摩にも澤山ある、現今こそ全國到る處に見るが、昔は畿內附近の寺院の境內などに、間々見る位であつた。

其後鎌倉時代になつて、洽く諸方に移植され、庭園などにも栽ゑられるやうになつたが、初めは決して庭には栽ゑなかつたと云ふ、芭蕉が初めて鎌倉に渡つたころの事である、淨密法師が庵の傍に栽ゑた芭蕉に突然花が開いた、其花の形奇しく珍らしいので、諸人門前に市をなして集まり、種々と評議をしたが、扨て何の花か解らない、大方優曇華の花と云うのが是れであらうと、人皆吉凶を心配して居た所、二位禪尼之を聞き、左近將監を遣はして淨密法師の庵に花を見させた、將監能く見ると芭蕉の花なので、逐一其由復命し、諸人始めて安堵したと云ふことがある、優曇華と思違へるなどは、隨分滑稽な話しではあるが、之に依つて芭蕉の諸國に分布された時代も略推察出來るのである。

芭蕉は又一名を『綠天』と呼ぶ、唐の僧懷素、性甚だ書を嗜む、然し未だ紙が無かつたので、芭蕉數萬本を種ゑ、其葉を以て書に供したと云ふ、其居所を綠天と號した、芭蕉を『綠天』と云ふことと之に始まる、又『怯風』とも呼ぶ之は『心虛含夕露、葉大怯秋風』の名句から來たのである、其の風姿に關しては森琴石の『畫題詩集』卷下に淸の高

珩が七言絶句を一絶載せて居る、曰く、

芭蕉

風動仙鸞尾滿庭、幽人歌枕幾回聽、雨聲昨夜多少添、又展芭蕉一葉青。

和歌にも屢々詠せられて、種々の意を寓せられて居る左に掲ぐる四首は、何れも『夫木抄』の所載である。

秋風にあふはせを葉のくたけつゝあるにもあらぬ世とは知らずや　前參議敎長卿

風吹けばあだに破れゆく芭蕉葉のあはれと身をもたのむべき世か　西行法師

きりぎりす間近かきかへにおとづれてよひの雨ふるにはの芭蕉葉　寂蓮法師

いかゝするやがて枯れ行くはせを葉にこゝろして吹く秋風もなし　民部卿爲家

俳句では松尾桃青、此植物を已が號として

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな

の名吟を遺し、其高弟春華園凡兆は

秋風の卷葉折らるゝ芭蕉かな　凡兆

と吟じて居る、明治の天才子規の句に名吟がある。

移植ゑて卷葉憐れむ芭蕉かな　子規

門破れて芭蕉やうやく二葉半　同

卷葉がちに一葉廣がる芭蕉哉　同

二葉垂れて一葉玉卷く芭蕉哉　同

芭蕉の培養法は先づ、冬から春先にかけて、地植のものを鉢に取り、五寸程殘して切取つてやる、やがて葉が出る、その芽の伸びて行くのを待ち、又取り除く、斯く出たら摘み、伸びれば搔きする中に、葉の大さは漸次小くなつて恰度見頃のものとなる、七月から九月頃までは殊に見事であるから、石附にしたり、ケト土で根を固め水盤に納めて陳列する、上品なもので甚だ趣味深い、陳列が濟めば成るべく日蔭の置場

所に置く、日中夏の強い日光に合はせれば、例へ暖帶の植物だと云ひながら、盆栽となつて、葉も柔かであるから直ぐ燒けて醜くなる、夫れに秋までは絶えず新らしい葉が出るものであるから古くなつて、色の變つた葉はどし〳〵取去る方がよい。

肥料は油糟を極く稀薄にして、適度に施してやる、若し肥料が强過ぎる時は、忽ち腐敗を招いたりすることがあるから、出來得る限り稀薄にすること、鑑賞の時期が濟んだら、再び地へ下して翌年を待つ、冬季は根を霜雪の爲めに傷なはれぬやう、注意して餘り烈しい寒氣の時には霜除の準備もしてやらねばならぬ、陳列の際には配合のよいやうに、石など用ゐることが行はれて居るが、其際は、平石を使うより、立石を使用した方が、餘程雅致深く見せるものである。

花　櫚（くわりん）

果樹の美と、花の姿で、春秋變つた眺めの出來る盆栽植物に、花櫚がある。

薔薇科に屬する落葉喬木で、漢名は『榠樝』、『花櫚』は俗字である、『木李』或は『木梨』とも呼び、日本では『からなし』『さぼけ』などの稱呼がある、日本にも產するが支那には殊に多く、盆栽等に仕立てられた優等の樹は多く支那產の『花櫚』から繁殖したものであるといふ。

自然性の樹は高さ二三丈にもなるが、盆栽としては先づ一尺乃至一尺七八寸位、四季を通じて觀賞に適して居るから、洽く盆栽家の愛するところとなつて居る、幹は石榴のやうに粗くはないが、膚は淡黑色で、古くなれば、土佐繪の樹木に見るやうな雲紋を現はし、甚だ雅致が深くなる、花は四月から五月にかけて開く、海棠に似て淡紅色を呈し、花瓣は五つで海棠より肉が厚い、葉は木瓜に似て、木瓜よりは大きく、周圍には細かい鋸齒を刻んで居る、秋になると、軈て枝頭に立派な果實を結ぶ、矢張木瓜に似て居るが、木瓜よりはグッと大きく、皮は甜瓜のやうに凹凸があり、熟すると淡黃色になり、芳ばしい香氣を持つて居るので、其頃此樹を陳列すれば、一堂爲めに

芳香馥郁たるものがある。

かく花櫚は、春の花の瀟洒にして美しいばかりでなく秋は立派な雅致ある果實を結び、早春は更に芽先が美しく、夏は緑葉にえもいはれぬ清楚な姿を呈し、落葉後亦冬の觀賞に適して居る、其重寶な點は多く石榴に讓らないのであるが、唯花は彼の莊嚴に及ばず、樹も尠く、逸品に乏しいのが缺點である、古くから庭園には植栽されて居るが、文學上からは一向に注意されて居ず、此樹を詠じた和歌などは頓と眼に觸れぬ、俳句には多少吟懷に上つたのがあるが是とて他の果實に比す時は、至つて少數である、勿論花を吟じたのなどは殆んど無い。

棕梠の木の隣に黄ばむ花櫚かな　之冲

出る度に讀で這入りぬ花櫚の實　吳天

花櫚の培養法は、先づ此の樹の特質たる發芽の非常に早い點に注意をしてやらなければならぬ、手入も夫れに準じて、期節に違はぬやう、細心の注意をする、春から順次其の培養法を述べて行くと、初めは植替である、季節は二月の中旬が最も適當で、鉢の底へは油糟の肥料を適度に培養土に混じて入れ、其上に成るべく輕く栽るてやる、植替が濟んだならば、空氣の流通よい置場所へ移し、日光浴を受けしめる、未だ寒氣が強い頃であるから、夕方になれば、軒下なり、室内なりに取入れてやる、若し其儘にして、夜の寒氣に遭はせる時は、忽ち樹を衰弱させてしまうことになる、かうしてだん〳〵月日が經つ中、軈て芽は開き、葉の後から紅色の苔が繰り出して來る、其の際又肥料を施してやる、此時の肥料は油粕を稀薄に水に溶解せしめたものがよい、花の開いた時は、他の盆栽も芽先の美しい時であるから、取り合せて陳列すれば却々趣味が深い。

五月の末に近くと花は大概謝してしまう、此時又も肥料を一回施してやる、矢張前と同じく油糟を稀薄にしたのがよい、次は水の施し方であるが、之は芽先前後から土の乾き加減を見、一日二回なり三回なり施すのであるが、分量は成るべく充分に施す、

普通盆栽の二倍位にしても一向差閊ない、秋になると美しい果實を結び、花櫚は四季の中、第一の觀賞期に入るのである、此時の注意としては、餘りに果實を多く結ばせぬやうにすることで、果實を澤山生らせれば、自然樹の精力をそぎ、衰弱を招くことになる、豫め果實の數を定め、其花殼丈け殘し、他は除き切つてもよい。

結實の前には殊に水の量を多く施してやる、若し怠つて水の分量が少い時には、決して立派な美しい果實は結ばぬものである、水さへ充分なら、果實は成長するに從つて外皮に光澤を增し、一層の美觀を呈する、之は花櫚ばかりでなく、總て果實を賞翫するものには、灌水の注意が肝要である、尙外皮の光澤を美しくするには、柔かい筆で時々果實を洗つてやる、但し此時指は決して觸れてはならない。

繁殖法は普通壓條が弘く行はれて居る、臺木の枝振のよい處を見て、其の下の方を一寸ばかり皮を剝ぎ取り、幹を細く削る、或は其木を斜に兩方から削つて、實生の木の根を挿し込み、土で蔽ふて外氣に觸れぬやうにして置く、軈て根を下して立派に壓條が出來る、これを行ふ季節は先づ三月の半頃が適當である。

野木瓜（むべ）

蔓生植物で、果實の形の、最も面白いのは、野木瓜である、野木瓜は、柿や木通（あけび）などと共に果實を觀賞する盆栽としては、誠に趣味の深いもので、園藝界では頗る珍重されて居る、野木瓜は別に『郁子』と書き『宇倍』と呼び、『奠實』ともいうて居る、我國には、太古から存在した植物で、近江國は殊に產地として名高く、種々趣味のある物語が、傳へられて居る。矢代弘賢の『古今要覽稿』に曰く

聖德太子の御時、奥島之內へ御成行幸、それより此所を王之濱と申傳候由、其時奥島村の內男子八人有之夫婦長命堅固にて罷在候旨に御座候、其時太子被仰候は汝等はめでたき者共なり、何故一家不殘長壽堅固に在之哉と御尋被成候へば、夫婦之者共申上候は和屋敷內箇樣之菓實每年生申候ゟ、家內給べ申候故無病延命に

罷在候かと申上候得ば、其菓實萸と御附被遊自今後供御に差上候樣にと被仰付候而萸供御料として奥島山を被下置候、之故隣郷へ山をおろし、山年貢を以供御に仕候由申傳候事云々

同書には、尙右の外『由緒書』正本の所載として、更に次のやうな物語も傳へて居る、時代も違ふし人も違うて一寸趣味がある。

むべは、むかし天武天皇大友の王子にをはれ給ひし時吉野へ落させ給て後、高市皇子を大將として、大友王子を亡し給て天位につき給ふ、初て近江國志賀郷の內、むべ山村の人御味方申候、七十の人は五十許にみえて、外は是に順じて差しよつて尋給ふに、むべ山にひとつの蔓物有、葉、桂に似たり、是を常に喰によつて皆百歳をたもつ、名は知らずと申よつて所の名をもつて蔓の名とす、夫れより年の貢に献ずといふ、のち代々兵亂に民くるしみ、君おだやかならず、いつとなく絶えしと也、權現樣御治世のゝち、後水尾天皇御たづね有て、又々年貢物とす、是を東福門院樣より秀忠將軍へ被遣候由、其種を紀州頼宣卿へ三つ被下、紀州にて初てまき候てのち江戸にはふえ候也云々。

此の野木瓜の供御と云ふことは、絶え〳〵ながらも、德川時代まで續いた、『年中行事』には『十一月朔日毎年例の如し近江國よりむべと云ふものを献ず、いつより奉り初めけるにや』とあり、『御湯殿上日記』にも『天正八年十一月一日するゑよりむべまいる』とある『禁中年中行事略』といふ書にも十一月の條に

朔日郁子を供す近江國高島郡より奉るむべと云ふ、豐年には三つ、次の年は二つ奉ると下行一貫文宛下され取に、つるはさるといふ、からす瓜の如し是は郁李のことか。

今は此の行事も、すたれてしまつた。

さて野木瓜は通草に似た蔓生植物で、花は六瓣、淡紫色を帶びて居る、五月頃開き秋になつて結實する、果は楕圓形で、外皮は濃紫色、味甘く渴を癒するに甚だ妙であ

る、葉も光澤美しく、晩春花時も却々雅致があるが、其の多く愛翫される時期は、矢張秋の結實後にある。

盆栽として培養するには、第一灌水が非常に大切である、水の分量が不足の時は決して立派な果實は見られない、次は花時の注意で、柿の條にも述べたやうに、開花中に餘り鉢を動かさぬこと、肥料は油糟か魚の洗ひ汁が適當である、鰊や乾鰮も簡便でよく、施し方は既に述べたやうに切つて鉢に埋めてやる、實を多くならせる時は樹に疲れが來るから、豫じめ實の數を定めて置く方がよい、姿勢は懸崖が一番よく適して居る。

木通は別に『通草』『山母』などゝ呼ぶ、『あきび』『あくび』『あけびかづら』其他澤山の方言がある、其花の形、葉の姿、實の容まで野木瓜を小さくしたやうなもの、野木瓜と同じく秋の觀賞には甚だ適してゐる、盆栽としての培養は中々の難物で、秋に結實させるには、充分注意して培養しなければならない、培養法は總て野木瓜に準じて行なひ、灌水と肥料は成るべく充分にしてやる、仕立方も元來蔓生植物であるから懸崖が一番多く行はれて居る、光澤ある五枚の葉の下から、笑み割れて紫の肉を出した實の、僅かに行く秋の名殘を見せた風情など、好個の俳畫であり、亦盆栽中の一異彩である。

柿（かき）

柿は秋の觀賞盆栽として、其の紅葉の變化多い色彩と果實の光澤美しい姿とを以て盆栽家の愛するところとなつて居る、本邦固有の植物で、支那にも澤山ある、其紅葉を賞し、紅果を賞味したことは隨分古くからのことで、『秘傳花鏡』や、『酉陽雜俎』と謂ふ書物にも、柿の七絶を載せて居る、『花鏡』の方を記す。

柿は朱果なり、葉は山茶に似て厚く大なり、古より柿に七絶ありといふ、一は此樹多壽、二に葉多陰、三に鳥巣はず、四蟲害少く、五に霜葉翫ぶべし、六に實食

ふべく、七に落葉肥厚、以て臨書すべし。

これに註があつて、柿の果と蟹との喰合せを禁じてある。柿の落葉に臨書するといふことは、『爾雅翼』にも『柿落葉肥大可二以臨書一』とある、『花鏡』の陳扶搖は之を自然箋と命名して居る、自然箋には、柿の外に、紅葉箋、蕉葉箋、梧桐箋など數十種ある、又趣味のあるものではないか。

柿の紅葉は、日本でも古くから愛したものであるが、文字に現はれたのは『伊勢家集』を初めとする、曰く

いづれの御時にかありけむ、大宮す所と聞えける御つぼねにやまとに親ある人さぶらひけり、親いとかなしうして男などもあはせざりけるを、宮す所の御せうと年ごろ云ひわたり給ひければ、暫しは更に聞かざりけるに、如何ありけむ、おやいかゞいはんと嘆きたりけるを、年ごろ經にければ聞つけてけり、されどすぐせこそありけめとて、殊に言はざりけり、唯若き人は、賴み難きものぞといひける程に、時のおほいまうちぎみに、婿に取られけり、親もさればこそなどいひければこの女耻かしと思ふほどに、此男の許より、人おこせたりける、この女の親は五でうわたりなりけるところに來て、柿の紅葉に歌をなむ書きたりける

人住まずあれたる宿をきて見ればいまぞ紅葉の錦織りける

柿の紅葉を詠じた歌は、却々澤山ある『夫木和歌鈔』には左の三首がある。

秋くれば山の木のはのいかならんそのふのかきはもみぢにしけり　民部卿爲家

いにしへのやまと言葉のあとゝめてはるかにあふぐ柿のもとかな　信實朝臣

山里は柿のもみぢに鳩啼きてしぐれも降りぬかぜもさむけし　寂蓮法師

尙『同鈔』には『柿のみは殘りて葉のゝなな散りぬるを見て』と題した一首を載せて居る。曰く

世の中にあらしの風の吹きながら實をばのこせる柿のもみぢ葉　源仲正

俳句には、柿の果實や、紅葉を吟じた名句も中々多い。

しぶ柿や一口は喰ふ猿の面　芭蕉

腸に秋のしみたる熟柿かな　支考

しぶ色に染るは柿の紅葉哉　宗鑑

柿の木であいと答る小僧哉　一茶

本よりもほの〴〵赤し柿紅葉　貞徳

ゆく秋の情緒を、僅かに枝に殘つて紅果一箇、葉一片に偲ぶのも、眞に柿の趣味である、其の尤品が秋の盆栽として異彩を放つのも、所以ありといふべしである。

柿には隨分種類がある、『本草啓蒙』には二百餘種あるといふ、併し有名な所では、『御所柿』『蜂屋柿』『西條柿』『衣紋柿』『百目柿』『富士柿』『祇園坊』『無核』『禪寺丸』『圓座柿』『似たり御所柿』『鶴の子』『霜丸』『甲州丸』『筆柿』『御所丸』『御室柿』『小澁』『豆柿』などが主である、何れも果實の優劣あつて一得一失はあるが、盆栽としては、形のよいのがよく、豆柿などは殊に妙である。

柿の盆栽作り方は、却々困難で、いまでも盆栽中の難物を以て數へられ、其美果を永く枝頭に留め、其葉を美しく紅葉せしめるのは、餘程老手でなくては出來ぬといはれて居る位だから、一層細心の注意を要する、すべて果實を賞翫する盆栽は、柿に限らず、隔年に其實を多く結ぶものである、今年數が多ければ、來年は必らず少ない、其翌年は、又數を增すと云ふ風であるから、此の自然的な樹の習慣には成るべく、反かぬやうにし、よく其心得で培養してやる、殊に花が謝して後、漸く實が成育しやうとすると、風の爲めに落されたり、害蟲の爲めに傷はれたり、故障百出、秋の末に至るまで美しい姿を留めるものは至つて稀である。

开で此の樹の習慣を心得て、實の數も隔年に殖やし、其の多くならせる時には、十分に枝を折込んでやる、此の方法は、春先發芽する頃を見て、枝を一二寸殘し剪定を行つてやる、肥料は多く油糟か、魚の腸などを用ゐ、稀薄にして、再三用ゐてやる、果實を結ばせるには、灌水を怠ることが出來ない、植替も矢張隔年に行つて新鮮な肥

料分を含んだ土で發育を助け、花時に置場を代へたり動かしたりして花を落さぬやうに注意し、折角實となりかけた時、又雨に遭はせると、直ぐに落ちて今迄の丹青も水泡に歸してしまうから、成るべくは軒下に取入れてやる、柿のやうに大きな實を結ぶものは、自然肥料も水分も、他の盆栽よりは多く要するものである、從つて鉢も許すかぎり大きいのを用ゐて培養すれば、漸次其の効果も現はれて來る。

姿勢の作り方に就いては、盆栽家にも種々の議論があるが、他の松や柏と云ふやうな種類とは、全然趣味を異にし、自然の大觀を寫すと云ふよりも、繪畫的の美觀を十分に味うやうにしなければならない、例へ葉一枚でも其の附き方に依つては、多大の懸隔が出來て來る、勿論自己の趣味に從つて仕立てるのではあるが、古來名匠の筆に成つたものなど參考にすれば、得る所も決して少くはあるまいと思ふ。

落霜紅（うめもどき）

秋の鑑賞盆栽は、紅葉物の美觀と、果實物の詩趣とを以て最とする。紅葉といへば直ぐに槭樹を指し、楓樹を數へ、果實といへば、柿や野木瓜、花櫚や木瓜でなければならぬやうに思はれて居る時、若し、紅葉と果實と双方を兼ねて居るものがあるとすれば、夫れは甚だ珍重すべきものである。

落霜紅（うめもどき）は即ち夫れで、其の紅葉の色彩は、到底槭樹や楓樹に及ばぬにした處で翠色やや紫に、紫は漸次紅に變つて往く變化は、槭樹や楓に見られぬ特長を有し、更に其の葉落ちて、萬朶珊瑚の珠を綴つたやうな果實の美は、數ある秋の盆栽の中で、唯獨り此の樹のみ有して居る特長である、是れが爲め、盆栽としては、かなり昔から珍重せられ、一部雅客の間には、甚だ珍重されて居るが、松柏や、石榴のやうに一般的に行渡つて居らぬのは、名樹として稱せられる程のものが少い爲めであらう。

落霜紅の漢字は、此の樹の秋の形態を最もよく現はして居る、實際此の樹が遺憾無く其の美觀を發揮するのは、地上の落葉樹の多くが、紅變し黃變して、最後の美觀を

現はす時である。

然らば、和名の『うめもどき』の語義はどんな理由かといふと、此の葉の形、楕圓形で、長さ漸く一寸位、恰度梅に似てやゝ形を小くしたやうなので、此の名があるといはれて居る。

植物學上の分類法に依ると、冬青科(そよごくわ)に屬する灌木で自然生のものは、其の樹の高さ、六尺から八尺位になる、幹や枝先の色は薄黑色で、僅かに綠を帶び、此の色彩がまた紅葉や、眞紅の果實と調和して居るので這般の色彩上の關係は、昔の美術家でも花鳥をよくした椿山などの作には、極めて鮮かに描かれて居る。五六月頃、青葉の腋から小さな白い花を開く、五瓣の淸楚なもので、勿論花として眺め得るほどの美は無いがさりとて捨てられぬ風情があり、庭園植物としては雨に打たれて、白く地上に散つた所など、好箇の詩題であるし、盆栽としても、少し變つた趣味を愛する人は態々夏の此の花時を見て、陳列する位である。

花が散ると軈て秋の初め、小さな實となる、初めは靑いが、時の經つに隨つて紅くなる。熟した頃になると、此の實を鵯鳥(ひよどり)が喜んで食べる。

俳人蕪村の作に、之を吟じたものがある、曰く

鵯鳥のうたゝ來鳴くや梅もどき

と、流石によく自然に着目し、かゝる微細な研究にまで及んで居る、詩人の吟懷亦敬服に値する。

落霜紅の果實は、普通紅色になるのであるが、種類に依つては、白色になるものと黃色のものとある。白色のものは、花もやゝ普通種より大きく、實も幾分大形である、よろづ臺品珍重を喜ぶ園藝界では、白實と云うて、大層大切にして居るが、『三才圖會』の著者は、

種子に白きものあり、異なるを以て珍となす、然れども赤きものに故かず

といふて居る、黃色になる方は、果も小さく、一體の姿勢が貧弱なので、此の方は唯

珍らしいと云ふ丈けで餘り問題にして居ない。

落霜紅に似たもので、同じ秋の盆栽として珍重されて居るものに『つるもどき』がある、即ち『つるうめもどき』で、普通の落霜紅とは性質を異にする衞予科の攀登性植物で、歎賞上の主眼とする處は、矢張秋の果實にある。葉の形は殆んど、落霜紅に似、秋黄變して落ちる、枝には無數の果實を結び、初めは翠色を呈し漸次黄色となり、更に一霜經ると、黄色の外皮は三つに割れて、中から燃えるやうな、紅色の肉漿が現はれる、此の際は、『つるうめもどき』の美觀の絶頂に達する時で、普通の落霜紅よりは一層艶麗な姿勢となるので、挿花としても面白く、盆栽としても、中々の勢力を把持して居る。

此の外に『うめもどき』の名を冠するものでは、『くろうめもどき』がある、漢名を『鼠李』と云ふ。葉の出形は對生で、形態からして、宛で兩者とは、趣きを異にして居る。

落霜紅を盆栽に仕立てるには、先づ野生のものならば、地植にして一二年充分に肥料を與へ、木の發育の良好なのを見たら、初めて鉢に取る、此の時期は、大抵春を以て最上とする、此際、不要の枝などは、多少切り取り、鉢の土は、壤土八分に砂二分位を混じて使用する、一時に多くの枝を截る事は、樹を衰弱せしめる原因となるから漸次折を見ては、姿勢を作つて行かねばならぬ。

かくて兎も角も、一箇の盆栽となつたならば、今度は十分に、形の上に心を用ゐ、毎年春の彼岸前後には必らず一回植替を行ひ、夫れから約四十日位過ぎてから、窒素肥料を與へる、普通油糟を極く稀薄にして用ゐて居るが、これは最も無難である。或は乾鰮、鯡等を少さく切り、鉢の隅へ二三片埋めてやつてよい、果實を眺めるのが、主眼であるから、夫れには花の開いて居る時、注意して成るべく動かさぬやうにする、花時に動かすと、結實が十分には往かない、秋になると果が色付き、葉が邪魔になり、つひ摘み取つてやりたくなるが、之は決して摘み取つては不可ない、自然に落

ちるのを待たねばならぬ。

落霜紅の培養は略々以上の方法に盡きて居る、『つるうめもどき』も矢張同じ方法で大過なく仕立てることが出來る。

槭樹（もみぢ）

槭樹は、秋の紅葉植物中、美觀第一とせられ、盆栽としては、春の芽先優雅に、夏は綠葉涼しく、秋は紅葉、冬季落葉後は寒樹の姿勢高雅なのを以て四季殆んど其の陳列を見ぬことが無い、其の洽く園藝家の愛翫を受けて居るのは、決して所以無きにあらずである、併し『もみぢ』と云ふ名稱には種々の說があり、或は楓と混同し、其の取捨判別にさへ迷ふ位である、併し盆栽界では、此間に整然たる區別を立て、槭樹は『もみぢ』と呼ばれ、楓は『かへで』と呼びなして居る、先づ『もみぢ』の語源を調べるに先立ち、我が國に於ける、紅葉植物愛觀の起源から記して見やう。

本邦に於いて、紅葉植物を愛翫して起源と見るべきは『萬葉集』第一卷に收められた額田の女王が長歌で、恐らくは文字に現はれた點から見ても之が最初のものであらう、天智天皇の御宇、天皇藤原內大臣鎌足卿に詔し、春山萬花の艶と、秋山紅葉の美と何れが美しいかと、宣はせられた、此時額田王、歌を以て、之を判じ讀んで曰く

冬こもり、春去りくれば、なかざりし、鳥も來啼ぬ、開かざりし、花もさけれど
山をしげみ、入りても取らず、草深み、手折りても見ず、秋山の、木の葉を見て
は、黃葉をば、取りてぞしぬぶ、青きをば、置きてぞなげく、そこしうらめし、
秋山あれは。

と、是より以後は紅葉を詠ずること、漸く繁く、勅撰『二十一代歌集』殆んど枚擧に遑もない程澤山の紅葉の歌を載せて居る、秋になると何故紅葉するかと謂ふ、科學的說明は姑く措いて、『もみぢ』の語源に就いて調べて見る

『もみぢ』と楓とが殆んど混同されてしまうたのは、[illegible]遠い昔のことではない、

『もみぢ』とは元來、葉の中に含まれて色素が變化して、紅色になつた謂ひで、『もみぢ』の『もみ』は即ちもみ(紅)で、紅くなるのを『もみづる』『もみぢし』と云ふ義から出たのである、夫れが何時しか『もみぢ』と云ふ固有名詞となつてしまつたのである。

槭樹が『もみぢ』と謂ふ名を獨占してしまつたのは、此樹の紅葉が、最も鮮かで美しいからのこと、然し『もみぢ』は單に紅葉ばかりでなく、黃葉もまた『もみぢ』である。『萬葉集』には、黃葉を『もみぢ』と讀ませ紅葉をも含ませて居るが、實際黃色の葉を『もみぢ』と讀んだもの中々澤山ある。

わが衣いろに染めたりうま酒をみむろの山はもみぢしにけり

の如きは其の好適例である。

槭樹の種類は甚だ多い、『一行寺』『板屋』『千染』『八房』『七五三の內』『淸玄』『獅子頭』等は最も多く愛翫せられて居る、一時槭の大流行を極めた際などは、其數二百有餘に上つたと云ふ、元祿時代は實に其の全盛期で、其の美しく特長ある葉や、蝶ともまがふ可憐な花の形は、種々の美術工藝品にまで應用され、園藝上からも『三十六歌選』だの、『七十二品』だのと種々の名を用ゐては、弄んだものである、今左に伊藤伊兵衛が著作にかゝる、『增補地錦抄』から、『三十六歌選』の種類を抄出して見やう。

小倉山　葉形切込多く十二刻みありとて、十二一重と號くといへども數に多少ありて夫に限らず、たゞ紅葉の品々美しく色を飾りて、いみじき模樣を呼ぶなるべし『今一度の行幸待たなむ』とは貞信公の眺めとや。(歌は略す)

高尾　葉は春の出葉よりして山楓なり、秋の色を賞せり、かの地は紅葉の名所にして種々に眺めなし錦を晒すと詠じ山姫の染ると讀み蜀錦にたとへ錦城居と眺めせしもに、くからず紅葉の樣々他に優れたり是は之れこの山の種とぞ。

八染　初春の出葉朱の如く花にも勝り八鹽が岡の秋を見るが如くなりとて名

く、又春より秋迄種々に色かへ絶えぬ眺めを八染と名く、八鹽の岡は名所にして歌人筆をひたし、種々に眺めなせしとて茲にいふは出葉花より早き眺めありて秋もなほよし。

笠取山　出葉愛らしく切込數あり丸葉なり十二一重の如く色黒み有り葉は厚き故、時雨無ければ紅葉惡し霧の時雨深き所にあれば紅葉勝れたり、此程彼の山より出でたるよし、これも名所にして『笠取の山はいかでか紅葉染めけむ』と讀み笠取の山の時雨はも種々に眺めなせしと。

赤地錦　春の出葉八鹽よりよく然も久敷紅色褪めず珍しきとて一名青海波ともいふ夏は青みて秋紅葉によし嵯峨やなる月に映らばさぞ。

手向山　葉形麻の葉透し隨分細かに切込透して出葉より秋迄紅葉の色宛ら秋の染葉を見るが如しとて錦楓又透しとも云ふ秋の色種々また勝れたり。

名月　一名板屋楓、葉形切込十二一重の如く隨分大きく葉多く附きたり木の下は露も洩らぬと云ふ心にや板屋楓と號く、よき見立、秋は葉色、紅欝金に染る、葉形大ければ紅葉の節、月もりたるは見物猶勝れたり。

七五三内　此種大原山より出づといふ如何、此地も紅葉の名所とて『秋の山紅葉を幣と手向れば』など貫之の讀みしも此邊のことかや葉形細長く切込深く、葉先に餘程紅の色あり、さりとは變りたり、葉形秋もよく染まる。

ときわ　葉形切込淺く小刻無く鋏にて鋏みたる如く色は極く青し秋も紅葉無くして散る、されど水蔭に植られば少しは色付事くあり。

切錦　葉切葉切に隨分細に透し麻の葉の如く青し枝振は外に異りて枝垂れ大木程景色勝れたり、秋の色、欝金と紅又は薄黄ばみ其種々なること之を描く事は繪師の筆も惱むべし、又の名を枝垂とも云ふ。

青葉　葉形常の楓の如く出葉より青し武州金澤稱名寺八木の内に青葉楓あり

之昔藤原爲相卿叱し給とて其冬迄青葉にて侍りしよし、此種なるか知らず今いふは春より秋迄外の楓に勝れ其色極めて青ければ名に呼ぶだにも紅葉よほどをそし。

かぎり　葉の周圍紅にて中青し古來猩々楓と名を呼ぶ無地の紅と青葉にも交り宛ら秋の紅葉の至極と見るが如くにて軈て散んかと惜む心せりとぞ。

紅の波　木葉も切錦に似て葉形さらりと透し餘程色あり高麗楓とも謂ふ、紅葉の色々又切錦に劣るべからず切々なる葉を種々に染めたるは紅の波ともいふべき錦洗ふ江の水にいみじき波の立つことなりとぞ。

紋錦　葉形山楓の如くにて、切込深く細し時雨深く或は霜の如くなり露などを得ては紅葉隨分見事に金紋を織りなせるが如し。

さほ山　葉形切込深く出葉に少し色あり、木もちと枝垂たり大和國佐保山より出たりと云ふ由霧深き所に植ゑ又は時雨しげき時は紅葉の品々筆につくしがたし。

袖の内　葉形小く十二一重の如く數々切込あり枝振も愛らしく秋は會々に染なせる此種を庭より袖珍らしと來り植ゑたりとて袖の内といふよし、葉の小さき故にや、南京楓ともいふ。

鹿紅葉　葉先より出葉より柿色なれば柿楓ともいふ薄柿のちと赤く見えたるを鹿毛色と見立たるが鹿紅葉といふも憎からず、秋もたいていに紅葉せり。

業平　春の出葉本紅の色隨分見事に葉形細く切込深くしなへたるやうに嫋やかなる、枝振楓の中に類無き色なり漸う日を重ねて紫色に變るは色なほ深く見ゆ、秋も紅葉よし。

かよひ　葉形切込深くありて業平に似たり、出葉紅と見ゆれど包みて紫色深く秋の色も、鬱金と黃鬱金、種々見事。

朝露　葉形切込ありて木も枝垂出葉よく秋迄薄紫の漸く薄青色かき枝垂ともいふ時雨しげく霧深ければ欝金と紅といかう又さゝき、いろ〳〵に染る。

奥州動揺　葉形切込深くして色紅紫此種奥州より出たるより號くと、木もたわに枝垂たれは枝垂といふとか又亂れて染たるをいふことか、秋も色よし。

しがらみ　葉形よし出葉薄色なり、縁を取る故口紅ともいふ、秋は餘木に違ひて欝金と紅を交へ打葉に色付く、黄纈纈林寒有葉と文集に出たるは紅葉の朽葉色なるを謂たりとぞ之等の色の如くならん枝振よく葉繁くつくなり是をし流れにとまるやう見立てしにや。

しぐれ山　葉形切ありて小く木も細く愛らし枝集りてよりたる絲に葉を付たる如くなれば絲紅葉ともいふ時雨繁ければ秋の色よし、さもなき時には紅葉の色不出來なり。

九重　葉切込多く數々にして丸く枝振もよく葉繁く附いて重ね見事に秋の色さま〳〵なり。

武藏野　出葉より秋迄紫、秋も些と紅に黄ばみ多く紫に交りて色付く一名野村楓

嵐山　葉形切込深くすかして出葉よりうつすりと色あり種々に紅葉せり。

立田　葉形常の山楓と同じ秋の色を第一とせり、立田は古より數の眺あり、『立田川唐紅』と業平よみ『流れざりせば立田川』『立田川にぞ幣は手向く』と心々に讀給ふよし今この種なりとぞ、紅葉勝れて種々なる。

佗人　葉形細長く切々有り縁に薄紅のかすりあり枝垂たる葉形は鳥の尾の羽に似たりとて鳳凰とも呼ぶ秋はさして紅葉も無く年によりて千々に色付き疾く散る。

待風　葉形切込深く小刻あり出葉より紅葉よし、春より常に秋の紅葉を見る

が如く秋はなほさまざまに染る。

しら波　葉形切込多く葉先に紅色あれば口紅にすかしとも云ふ、枝もたわゝに枝垂れ葉多く重ねたる紅葉の種々に染なせるは網代に寄せたる落葉のさまざまの如しとかや。

深山楓　葉形逞しく靈ありて木も太く田舍楓をも云ふべし、紅葉は隨分よし。

通天　葉は山楓なり洛陽東福寺通天橋の名木なり見下て眺むゝ此種なりといふ秋の紅葉勝れて色よし。

飛鳥川　葉は山楓の如く葉の中より白き筋あり、葉半分白く青く無地の白き葉もあり、されば名付て二面ともいふ、今年の白き枝來年は青葉にも出で、又は青白交り年々變り易く定めなき故、飛鳥川といふ。

村雲　葉形切込深く木も些と枝垂たれば、大枝垂ともいふ、秋は欝金と紅又は薄紅交り染る。

唐錦　葉形山楓の如くにて秋の紅葉種々に、霧時雨あるか、又は濕深き所に植られば其種々なること錦繡の織物の如くなり。

裏紅　葉形切込ありて出葉より紅にして後程紫色に變り夏も紅に、紫、秋は葉の裏より色付きて面の色に勝れりとて、裏紅といふ、紅葉も下葉色よし。

械樹の培養法は、毎年春の彼岸前後に、一回植替を行つてやる、培養土は壤土即ち眞土に砂を加へる、分量は砂を多くして六分、夫れに土四分の割合が適當である、元來優雅な樹であるから、其の姿勢を保つ上からは植替をせぬ方がよいと云ふ人もあるが、矢張年に一回は植替へてやらねばならぬ、剪定は發芽の後がよい、十分發芽しない中に切り込むと、切口から水を出す、此水が芽に付くと、忽ち芽が止まつてしまうものである。

摘込で姿勢を作つて行くのは、芽の開かぬ中がよく、二葉殘して摘み込む、若し此

の方法でないと枝が伸び過ぎて形を壊してしまう、肥料は油糟が一番よく、極く稀薄にして六月頃迄施してよい、其の以後は控えてやらぬと肥え過ぎて醜くなる、秋になつて紅葉を美しくするには、六月頃迄十分日光浴を受けしめ、七月過には強い日光は避けてやる、若し此儘にして置けば葉の傷む患がある、西日は嚴に避けて、必らず簀下に取入れる、西日にかければ、葉先は全然見られぬ程燒けてしまう。

械樹の姿勢の仕立て方は、元來優雅を主とする樹木故、成るべく繪畫的趣味を豐かにした方が面白い、冬の中は自然の縮圖とも見られるが、夏、秋は葉の大さ過ぎる爲めやや調和を缺くからである、八房のやうな小葉のものはこれ限りではない、針金をかけて枝や幹を矯めるのは、春、發芽後がよい、柔かい銅の針金に充分紙を卷いて懸けてやらぬと、幹に傷がつく、一度傷がつけば、決して直らぬものである、充分注意すべきである。

楓樹（かへで）

楓樹は、械樹に次いで紅葉の美が優れて居るので廣く愛翫せられて居る、春の芽先夏の綠葉、秋の紅葉、冬の寒樹と、四季其の姿を改め、絶えず觀賞の出來る點も械樹によく似て居る、併し其の幹枝の姿勢が、械樹の飽くまで優艶なのに比し、やや鋭い所がある、械樹の女性的なのに對して、楓樹は男性的である。

『かへで』の名稱語義は、其の葉の形から來て居るので、恰度蛙の手のやうであるから『蛙手』と謂ひ、夫れが轉訛して『かへで』となつたのである、『萬葉集』には『加敞流氐』の文字を用ゐ、或は『蝦手』と書いて居る。

『蝦手』の文字は、恐らく蝦蟇の手に似て居るので、かく名けたのであらう、其他『鷄冠木』を『かへで』とよませたのもあれば、『加戸天』と書いたのもある、『採藥錄』には『鷄楓』と書き、『機楓』に作り、『大和本草』にも同じく、『機樹』の文字を用ゐて居る、

我が國では昔から、紅葉として詩人の詠賦するところとなつて居るが、支那では楓の字を用ゐて、其の紅葉を愛して居る、『唐詩選』には

楓岸紛々落葉多、洞庭秋水晩來波、乘興輕舟無遠近、白雲明月弔二湘娥一。

とあり、又有名な杜牧の詩にも

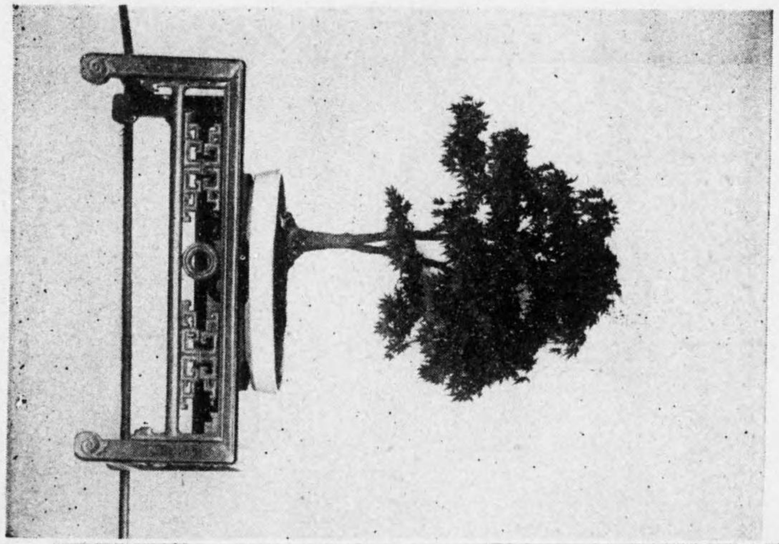
遠上寒山石逕斜、白雲生處有人家、駐車坐愛楓林晩、霜葉紅於二月花。

とあるが、本邦では其紅葉槭樹に一歩を譲つて居る。『古今要覽稿』草木部に曰く

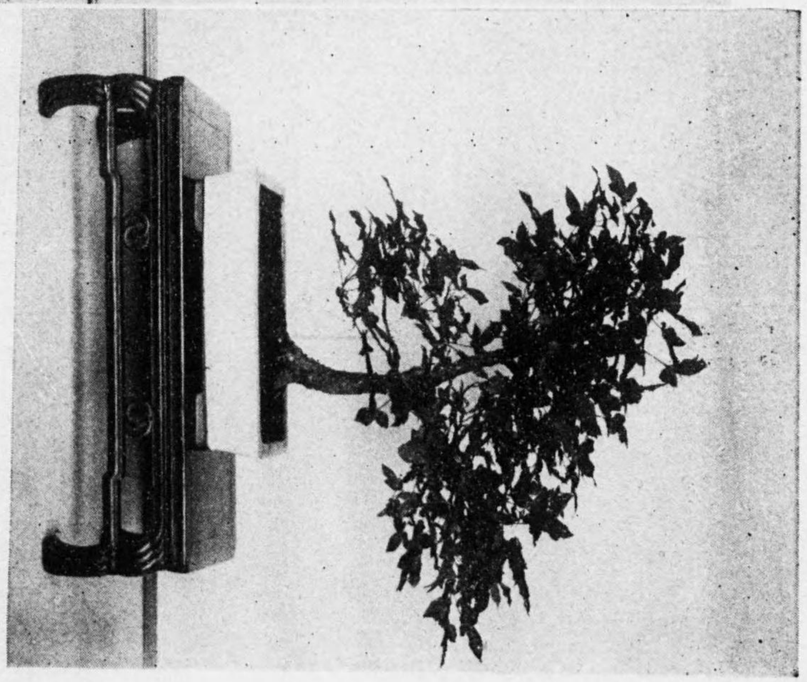
紅於二月花といへども、本邦にては紅葉鮮紅ならず、多くは黄色に染めて落つ、こは風土の異なるに依りて然るべし。

とある、けれども、これは培養の方法如何に依つて、甚だしい氣候の不順無い限り隨分艶麗な紅葉の色彩を見ることが出來るのである、同書に又曰く

又或る人の説として、楓は一種にあらず、丹楓、青楓、雅楓の別あり、各葉、色を異にす、先年舶來せしものは青楓にて、晩秋に至りて黄色を帶び、吹上御苑にあ



楓唐錦



楓唐

る所見なり、又染井の花戸に植うるものは、雅楓なり、又薩州にも楓あり、是れ丹楓なりといへり、しかれども青楓は其葉未だ紅葉せざるものをいひ、丹楓は其の紅葉するものをいふ、なれども紅葉するとせざるの別あるものか、未だ詳かならず、又染井の花戸にあるは、雅楓なりといへば、唐楓を雅風といふなるべけれど、未だ其の據を知らず。

この雅楓は矢張唐楓のことらしく、葉の大さ普通の楓樹より大きく、紅葉さまゞゝである、唐楓が我國に輸入されたのは、享保九年のことであるから、其當時は、得難い珍樹として眺められたものであらう、唐楓に就いては染井の伊藤伊兵衞が、其著『地錦抄附錄』に左の如く記して居る。

とうかへで、就御用長崎へ持渡り候唐楓、葉形極めて三極、兩對に付き春の出葉薄く色あり、後ほど青く葉表すべよく、光有りて青漆にぬるが如く、夏も變らぬ色、不斷ながめたえず、秋の紅葉あざやかに洗朱のごとく、又は薄紅黃色さまざ

ま交り染る。

とある。唐楓は其葉、普通の楓に似て居る所から、楓の名稱を冠せられて居るが、實は金縷梅科（まんさくくわ）に屬する樹で、本邦にも澤山あるとのことである。

楓樹の種類は、普通大葉小葉の二つに區別して居る外に、小筋性と岩石性と分けて居る、小筋性は枝の繁茂する狀が極めて密で、筋のやうだと云ふ所から命名され、岩石性は幹の膚が、松や柏類のやうに裂けて、岩石の披麻を見るやうな所から命名されたもの、老樹になると蝶の形をした果を結ぶ、之も一種俗を脱した趣味がある、勿論盆栽としても、此の實附は非常に珍重されて、同好家をして垂涎三尺の思ひあらしむるものである。

楓樹の盆栽培養法は、樹が非常に强壯で、保存には難が少いから、比較的手數を要さない、先づ春の手入から述べると、三月上旬未だ芽を發せぬ前に、植替をしてやる之は他の盆栽より早い方がよい、此際の培養土は眞土に砂を等分に混じ、充分細かく篩つたものを用ゐる、古い鉢から拔くと、細根が一杯に伸び、鉢の形に固つて居るから、土をよく落し、周圍の細い根を鋸の齒のやうに成るべく深く切り込む、併し本根は傷けぬやうに注意する、切込が出來たら、前に記した培養土でごく輕く植ゑてやる、植替が終つて後は、約二十日間程經過して、初めて肥料を施こす、肥料は油糟を約三十倍に水に溶解せしめた稀薄なものを、五日に一回、若しくは一週間に一回位施してやる、次は摘み込である。楓樹は發芽が非常に繁り、その儘にして置けば、姿勢を崩すことがあるから少し早く屋外に出し、摘み込む、やがて芽は伸びて固まつて行く充分葉の揃ふまでは、肥料も續けて施さねばならぬ、唯梅雨の際は肥料を施すと却つて害を釀す。

置場所は他の盆栽と同じで、空氣の流通よい所を擇び嚴に西日を避けてやる、若し一度でも西日に合せると秋になつて紅葉の美は觀られなくなつてしまう、姿勢の作り方は、直幹としても、懸崖としても、石附にしても、寄植にしても、殆んど往く所佳

ならざる無き有樣である。殊に近來小葉の楓を寄植にしたり、石附にしたりすることが流行するが、石附には至極適して居るから忽ち盆栽家の爭ふて仕立てるやうになつた、尙最近小品盆栽の流行につれて、小葉の種類各種はの姿勢に仕立てられ、陳列會の席上などには、殆んど此樹の姿を見ぬことはないやうな盛況を呈するに至つた。

黃　櫨（はじ）

紅葉を鑑賞する秋の盆栽としては、黃櫨も逸することの出來ぬ樹木である、十月の末から十一月の初にかけて未だ下葉は綠の色の鮮かな中に、上梢は既に眞紅となつて燃えるやうな色彩を見せて、漸次下枝に向つて褪紅色となり、樺色となり、欝金となり淡黃となり、更に一轉して萠黃となり、綠となる、千紫萬紅其枝に從ひ、其葉に應じ忽ち唐錦を織懸けたやうになる美しさ、槭樹や楓樹とは、又變つた味がある。

黃櫨には漆黃櫨と蠟黃櫨の二種類ある、昔から此樹を以て弓を作つたこと古書に記され、『天之波士弓』と云ふ名も殘つて居る、其幹を裂けば中味は鮮かな黃色なので屢々染料に用ゐられた、天子の御袍の黃櫨染と云ふは之から染めたのである、鎧には『黃櫨匂』がある、其縅し方は此の紅葉の色彩に習つたのである『和漢三才圖會』は其形態に就いて記して曰く

黃櫨和名波邇、之を俗に波時の木といふ、按ずるに黃櫨は黃色に染むるを以て、天子の御袍を黃櫨染と稱するなり、之を帛に染むるに、砥石の水を用ひる時は則ち黑茶色となる、その葉、小にして淺靑色、莖は少しく赤く三四月小き白花を開く、細き子を結び、秋紅葉するに至る。

『大和本草』には次の如く記して居る。

黃櫨、漆、白膠木の類なり、其材作レ弓、其葉秋紅葉す平原の地にも能紅なり、多く植るて可二愛賞一、其實蠟燭に作る、民植るて利とす、植うる法、其果を花に包み水中に浸す事三七日、稻子を浸すが如し、取出して植うべし、後生ずるまで七日

程は糞水を注ぐべし、糞一桶に水二桶を合すべし云々。

黄櫨の紅葉は、かく秋を彩る樹木の中、殊に美しい所から、古來和歌などには澤山よまれて、詩人の愛翫を受けたものである、先づ有名なのは、『新古今集』第五卷法性寺入道前關白太政大臣家の歌合に、前參議親隆が

鶉なくかた野に立てるはじ紅葉ちらぬばかりに秋風ぞ吹く

と讀んだ歌である、其他『玉葉集』には

時雨ゆくはじの立枝にかせ越えてこゝろいろつく秋の山もと　藤原定家

を載せ『夫木和歌鈔』には

一目みしとほちの村のはしもみぢまたも時雨て秋風ぞ吹く　順德院御製

有馬山しくるゝ峯のときは木にひとり秋しるはじ紅葉かな　民部卿爲家

などの和歌がある。

黄櫨の形態は漆に似て、葉は一條の葉柄に十枚乃至七枚を附け、幹はやや紫紅色を帶び、古木になると、皮は漸次裂けて雅致深くなる、盆栽としては、直幹若しくは懸崖に仕立てられ、葉の大さも縮少して秋は美しいものであるが、姿勢の上から優品が少く、唯纔かに紅葉を以て一時の觀賞に適するばかりなのは、此木の一大缺點であらう、盆栽家も從つて他の盆樹程珍重して居らぬやうな傾向がある、併し仕立て方に依つては十分趣味のある姿となり、秋の紅葉のみならず、夏の觀賞にも適するやうになるのである。

培養法は、毎年春の彼岸前後に一回植替を行つてやる恰度枝から芽が吹き出して、其の出揃つた頃である、此際使用する培養土は、壤土即ち眞土二分に、砂八分と云ふ割合で能く混和し、濕氣を去り、蟲の卵などないやうにし輕く栽ゑてやる、若し濕氣を含んだ土で栽ゑ、其上から又灌水でもすると、決して新らしく根を下さぬものである、肥料は矢張極く稀薄にした油糟が適當である、植替へてから、短くとも四週間位經てからでなくては施してはならない、肥料が早過ぎると先に栽ゑて充分に枝が下り

て居ないから、直ちに故障が起る、根腐れになる、次は枝を剪定して樹の姿勢を作る時の注意であるが此樹は甚だ金屬を忌むものである、开で枝を切るにも決して鋏は用ひず、手で折り取つてやる、長く伸びたら折り、伸び過ぎたらば手で掻く、其中に姿勢は漸次整うて來るのである、若し過つて鋏を使へば、其切口から必らず腐り込んで大害を釀すことになる、秋其の紅葉を美しくするには、曩に述べた械樹や楓の注意を十分に會得して置かねばならぬ。

紅葉蔦（こうえふつた）

盆栽として夏の綠葉、秋の紅葉を愛翫するのは、普通の蔦よりも遙かに葉が大きく、光澤のある『紅葉蔦』で、盆栽界では、此の紅葉蔦を『地錦』と稱へて居る、其紅葉の美しさは、古來幾多の名歌名文に現れ、宇都の山は、此の紅葉した蔦に名高い名所である、業平が『伊勢物語』の東下りの條に

宇津の山にいたりて、我いらんとする道は、いとくらうほそきに、蔦がつらはしげりて物心ほそく、すゞろなることゝ思ふに修行者あひたり。

とある、『蔦の細道』『蔦の下道』などゝ宇津の山に歌に讀むのは此の一節から來たのである。山路に繁る蔦かつらの紅葉、眼のあたりに見るこゝちがする。

『地錦』の文字は、蔦の漢名で、別に『絡石』とも呼ぶ（一説には絡石は定家がつらの異名であると）地に這ふて錦を織ると云ふ意味からであらうが、誠に此植物にふさはしい名である。尙『蔦』は『ほと』と讀むやう『新撰字鏡』には記してある、或は古名であらう、併し今は餘り行はれて居らぬ、『つた』と讀むのは、地に這ひつたふと云ふ意味から、斯く命名されたものだといふ。

紅葉蔦は總ての蔦の中で、最も美しく、葉の大さは一寸五分乃至二寸位、尖角が三つに分れ、間に深い刻込が有て、肉厚く光澤殊に美しい、蔦の紅葉を詠じた和歌は古來頗る多く、殆んど數百千首の多きに上るであらう、有名なのを四五首拔いて見る。

住のえにかゝれるつたのもみぢ葉は波もいくしほよりて染むらん　藤原俊成

秋のいろを音に聞けとやはつせ山つたにうもれて鐘ひゞくらん　慈鎮和尚

しけりあふ蔦もかへでも紅葉して木かげ秋なる宇津のやま越え　宗尊親王

宿うづむ軒端のつたの色をみよみやまがさとの秋のけしきに　參議雅經卿

時雨なれどよそにのみ聞く秋の色を松にかけたるつたのもみぢ葉　俊成女

俳句にも名家の作には、蔦紅葉の美を遺憾なく吟じ出したのが少くない。

かや葺の隣ありけり蔦紅葉　芭蕉

打返し見れば紅葉す蔦の裏　蕪村

なま壁や秋を忘るゝ蔦紅葉　言水

などは有名な句である。

地錦の種類は澤山ある、緑葉の中に脈の紅色を帶びたもの、或は葉の表面葉色の隈を取つたもの、之は秋になつて紅葉も美事であるから、一番珍重されて居る、盆栽としての培養法は、春の彼岸前後植替を行つてやり、植替が濟んでから、十分に肥料を施して發育を助ける、肥料は油糟か鰊が適當である、油糟ならば既に再三述べた通り三十倍に水で延ばして用ゐる、鰊なら、一寸か五分位に切つて、鉢に埋めてやる、秋充分に紅葉せしめやうとするには、かく充分に肥料を施し、其上盛に日光浴を受けしめる、日光浴は其葉の肉を厚くし、且つ強くするものである、若日蔭で培養したものとすれば、葉弱きに過ぎて力なく、從つて充分に紅葉するやうなことがない。

既にかく地錦には、日光浴が必要であるから、置場も成るべく日光のよく當る所を擇まねばならぬ、空氣の流通にもよく注意する、葉の大きな厚いもの故、餘程風通しのよい所でないと、幹や枝にも風が通らず、葉裏には虫などが巣をかけて害を招くことがある。

姿勢の作り方は、懸崖が第一である、間々懸崖外の姿勢に作つたのも見ることがあるが、多くは無理がある、併し懸崖は水の吸收が中々困難であるから、其點には細か

に注意してやつて、水を潤澤に施してやる、秋になると枝の先に、大豆位の大さの果を結ぶ、紫黑色を帶びて來る、一寸風情が無いではないが、此を其儘熟せしめると樹を疲勞させるから、成るべく取除くがよい、元より葉の美觀に及ぶべき程のものでないから、取除いたとてさのみ惜しくはない、繁殖法は壓條である、根下しも早く、忽ち肥えて實生か壓條か分らぬ位になるから、重に之に依つて繁殖を圖つて居るのである。

烏臼（うきう）

烏臼は近世に至つて、支那から渡來した植物である、葉の形狀は、樺、菩提樹等に似て、夫れより小さく、且肉厚く、葉の滑澤は一寸公孫樹のやうである、葉の緣邊には鋸齒を刻まず、幹の膚はやや大實石榴のやうである、其の秋の紅葉は、眞に艶麗を極め、色の染め方黃櫨に似て黃櫨より細かに、漆に似て漆よりも鮮かである、一枝未だ綠なのに、一枝は既に眞紅、一葉黃金色なのに、相隣る一葉は樺色と云ふ風に、黃紅紫綠錯雜して錦の如く、復雜した色彩の美觀は、全然槭樹や楓樹と趣を異にして居る、日本には野生は極めて尠いが、九州には會々大木を見ることがある。

烏臼には葡萄臼と鷹爪臼の二種類ある、本邦に渡來したのは葡萄臼の方だと云ふ、何れも能く紅葉し、支那では其高さも數仞に及び、秋になると、錦繡もて空を張りつめたやう、美觀言語に絕し、夏は綠葉能く繁茂して日光を透さず、頗る納涼に適して居ると云ふ、『秘傳花境』には曰く

柏一名烏臼、一名桕柳、浙東江西より出づ、樹最も大にして葉は杏の如く而して薄く小、淡綠色なり、以て帛を染むべく、花は黃白、子は黑色にして以て蠟を取るべし、其の子、中細く核より油を搾るべし、燈に燃し傘に塗る、食ふべからず、食すれば則ち吐瀉す、木は必らず相接して植ゆ、接せざるものは實を結ぶと雖も多からず、秋暖く紅葉す、觀るべし、亦秋色の少なりとすべからざるなり。

とある、陸放翁は其家集に『暮秋』と題して、

　烏臼微丹菊漸開、天高風送雁聲哀、詩情也似辨刀快、剪得秋光入卷來。

と賦し、林和靖は『水亭秋日遇成』と題して

　巾子峰頭烏臼樹、微霜未落己先紅、凭欄高看復下看、半在石池波影中。

と、日本では『とうはぜ』若しくは『なんきんはぜ』と呼び德川時代から、花屋植木屋の店頭を飾つたものではあるが日本の文學とは全く沒交渉で、此樹の紅葉を歌つた和歌などは一向見當らない。

烏臼の盆栽としての價値は、其の紅葉と共に綠葉にもある、唯樹が尠いためか、其趣味を愛する人が稀な故か今日まで餘り優等な姿勢を具へたものを見ぬのが甚だ遺憾である、尙烏臼の行はれぬ原因としては、元來暖地の植物故、風土の變化から培養に甚だ困難な點からではあるまいかと思ふ。

今日まで經驗された、培養法の一番好結果を得つゝあるのは、先づ冬季寒氣を避けてやることが、第一の條件である、如何に名木でも、一度寒氣にあはせ、霜雪にあはせれば忽ち、衰弱し、甚だしきは枝枯を生じてしまう、之は是非窖なり温室なりに入れて、適度の温度に浴せしめて置かねばならぬ、此の枝枯と云ふことは、持込上、到底免れぬといふ人さへある、併し小な枝なら、例へ枯れても、春の芽先になれば忽ち回復するやうになるが、大きな枝になると、幹に迄枯れ込んで、折角の丹青も水泡に歸せしめてしまうのである。

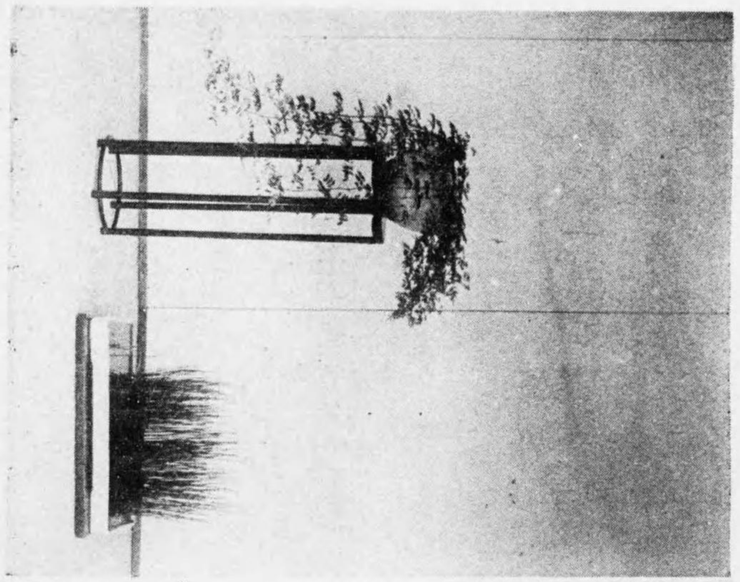
樹容の作り方は、大概直幹が行はれて居る、懸崖にしても風情はある、春先になつて芽のだん〳〵出て來る頃を見て、少しづゝ剪定し、不用な枝は成るべく摘み取つて形を整へて行く、既に一葉の葉にも風情があるから自然の姿を寫すと云ふよりは、裝飾的に、繪畫的に仕立てゝ行けば必らず面白い。

針金を懸けて枝を直すには、春先發芽前後がよく、夫れから秋までは、梅雨の期節を避けて、絶えず肥料を施してやる、肥料は油糟を稀薄にして、一週間に一度位施す

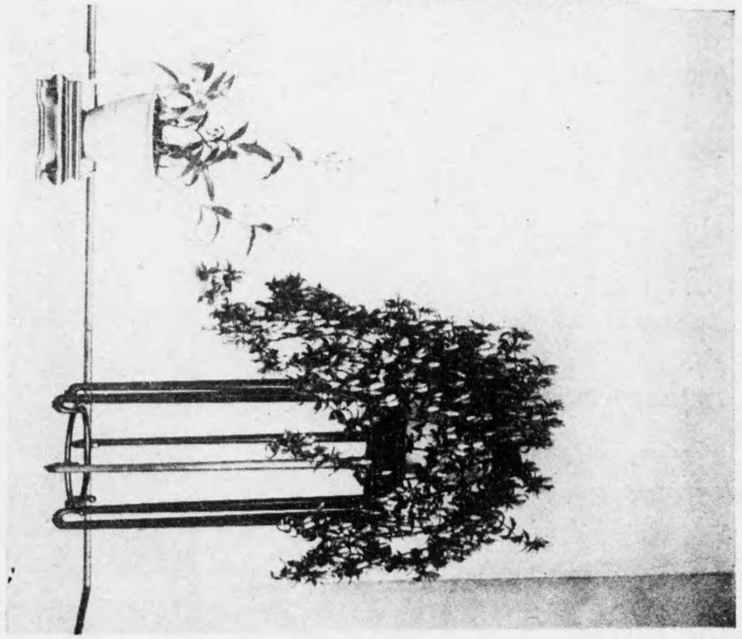
か、蠶の糞を水に溶解せしめ、水の漸く黄色に色付く位にし、よく臥かせて、夫れを時々施してやる蠶糞は、葉の光澤を著しく増すものである、夫れから灌水は他の盆栽通り、甚だしく乾燥せしめぬ程度に與へ、夏期は午前中充分に日光浴を受けしめる、多少強い日光に浴せしめても械樹のやうに、直ぐに先を燒け爛らすやうなことはないが、西日は避けてやる、置場所等は充分暖かい所を擇ぶのが必要である、かうして細かに注意しながら育てて行けば、よし多少、土地が變つて居ても、徒らに枯らすやうなことなく、秋の紅葉も十分に見られるのである。

龍　膽（りんだう）

龍膽が、盆栽植物として取扱はれ、園藝界に相應の地歩を占めるに至つたのは、明治三十年前後、恰度東京の園藝界に、高山植物の栽培が非常に流行した頃で、『おやまりんだう』や『とうやくりんだう』が、採取され栽培されたのが動機となり、著しく此



蔵合楚　賊　木



すぎゝとぼ　膽　龍

の方面の嗜好に適し、夫れからは、秋の草物盆栽には、無くてならぬものとなつてしまつた。

實際、天地が秋の頃となつて、苅萱が末葉をそよがせたり、雀萩が下葉を染め出したりする間から、あの澄み透つた瑠璃色の花と、緑の濃やかな、輪廓の正しい葉を見ると、何ともいへぬ凛々しさを感じる、若しそれ、之を盆栽として、他の山草類を寄植にし、床上に陳列するならば、身全く室内にあるを忘れ山野の自然に親しく接するの思ひあらしむるであらう、斯に龍膽としての價値がある。

扨て龍膽は、龍膽科に屬する宿根草で、山野に自生する、我が固有植物である。春の初め三四月、頃芽を發し、秋になつて花を開く葉は一見笹の如く、並行脈を有し、尖端鋭く花は瑠璃色で、漏斗狀を呈し、瓣は五つに割れて居る、斯して此の花の特長ともいふべきは晝は其の美しい花を開いて居るが、夜になると徐かに瓣を閉ぢてしまう、之は山野の露多き處に自生するのであるから、之を花の中に入れて雄蕊や雌蕊の

機能を傷はぬやう、自然が與へた機能の一つである、莖は二三尺位の高さに達し、長くなると地に這ふ性を有して居る、其の枯れ初めに草の中から、氣高い姿を出して人目を惹く、姿を清少納言は『枕草子』の中に記して

苅萱、龍膽は、枝さしなども、むづかしげなれどもよの花みて霜がれはてたるに、いと花やかなる色あひにて、さき出でたる、いとをかし。

と褒めて居る、流石に清少納言で、花を見る眼が決して凡では無い。

龍膽の名稱は字の通り『りうたん』と訓むのが正しい、それは此の草の根が、非常にに がく、且つ辛いので、龍の膽のやうだとて、かう名付けられたのである、此にがく且つ辛い部分が、古來藥用として、珍重せらるゝ處である、方言には『にがな』といふのがある、同じ意味であり、古語には『衣夜美久佐』といふ、病の折に用ゐる草、即ち藥用植物の意で之を見ても、此の草が如何に古くから藥用植物として珍重せられて居たかゞ解るのである、尚其の一種たる『とうやくりんだう』に關しては、日光山緣起に、白兎が此の草を採集し病んでゐる兎を救つたのを、仙人役小角が見て世に弘めたといふ口碑もある、それかあらぬか、日光には此の草が非常に多い、日本アルプスの諸山にも多いが、人の餘り知らぬ處には、信州下高井郡澁峠に到る道で琵琶池附近は、『おやまりんだう』が非常に多い。

序に龍膽の藥用としての、價値を記して置くが、此草の根は、第一に下腹部の風濕を除き、臍の下、足に至るまでの腫や痛みも癒し尚寒濕、脚氣を治すといふ、藥品苦味丁幾は此の草の根に、橙皮、酒精其他の藥劑を調合して拵らへたものである。

次に龍膽の品種を擧げて見やう、種類はさのみ多くはない。

くさりんだう。つるりんだう。とうやくりんだう。みやまりんだう。たてやまりんだう。おやまりんだう。ちしまりんだう。こけりんだう。

この中、源氏の紋どころとして、三歳の童子も知つて居る笹龍膽といふのは、草りんだうで、花を正面から見た形である、蔓龍膽は著しく這ふ性を有し、他の種類は、皆

莖の上部に花をつける特性を有して居るに拘らず、此の種類は、葉の間から續々苔を出して開花する『みやまりんだう』はその丈けが漸く三四寸しかならぬ、可憐な愛すべきもの、『たてやまりんだう』『おやまりんだう』『ちしまりんだう』何れも高山植物として珍重され、下界の植物の企て及ばぬ威嚴を備へて居る。

扨て今度は此の草の、盆栽としての仕立方である、實生は困難であるから、矢張初めは山野から採集して仕立てなければならぬ、唯高山に自生するもの丈けに、栽培法が頗る困難で、盆栽家の中にも難物として取扱はれて居たものである、何故かといふと、第一には土で、迚も山の上の土のやうなものは下にない、日光や濕度も違ふ、开で稍之に近い方法として、出來る限り木の葉等を腐らせた、腐蝕土を作り、之を極く細かに碎き、幾分山砂を加へて栽る、多少の濕氣を含ませる此の邊の手心は、迚も筆で言ひ盡せるものでないから親しく採取當時、實地に就て山上の土を研究する必要がある、かうして、栽る付け終つたなら、成るべく炎天に出さぬやうにする、夏九十度の暑さにあはせ、あの強い日光に直射せしめたならば、一堪りも無い、是非共葭簀の下か、木蔭等に取入れてやらねばならぬ、水の與へ方は、適度の濕潤を保つ程度でよい多過ぎると根を腐らしてしまう、極く細かい如露で與へる、かうして根が落着き、來年も持つやうになり、二三年持込んで、根分も出來れば、實生も出來る、要は初めの一二年間で理窟よりは手間である、よく油斷なく面倒を見、手入を怠らぬのが勝ちで、肥料の心配などは此の草の培養上には抑も末のことである。

公孫樹（いてう）

公孫樹は秋の黄葉を觀賞する第一のものである、槭樹や楓樹のやうに弘く愛翫されては居らぬが、之は樹容の然らしむる所で、昨今に至り其の樹容の高雅な點が、漸く識者の中に認められ、漸次愛翫者を增して來たのは喜ぶべきことである。

公孫樹は今更言ふまでも無く、支那から日本に移植された植物である、其の渡來し

た時代に就いては、記錄に見るべきものも無ければ、史乘に載するところも勿論無い、唯野生のものが更に無く、當時支那の文明と、密接の關係ある、佛閣精舍の庭園境内に多いのを見ても、大方は推知することが出來る、然らば其の渡來した時代は何時頃かといふと、欽明天皇の御宇、佛敎の渡來と共に種々なる文物が輸入された、公孫樹も實に其の一らしく想像されるのである、更に奈良朝時代に至ると、當時は全く佛敎の心醉時代で、國中到る處、空を衝く伽藍堂塔が建立される、廣く取つた庭内には、數多の公孫樹が植ゑられた、今日殘る古寺の境内に、多く公孫樹の老木を見るのは、實に其頃の幾代かの子孫に當るもので、其の樹の形の神嚴な所は、精舍佛閣として、閑雅幽寂ならしむるに、最も適當とせられたのである、だから佛敎とは種々なる傳說や口碑となつて、離るべからざる關係を有して居るのである。

更に植物學者の說に依ると、公孫樹は前世界の遺物であつて、其の種類は大方滅亡し、僅かに地層の中などに、其の片影を見るのみで、今は僅かに東洋の一部にのみ殘留して居るとの事である、東洋の中でも、往昔最も多かつた支那には少くなり朝鮮にも稀になつて、僅かに日本にのみ見らるゝのである、之は學術上から見ても、甚だ注意すべきことで、此の貴重な樹木には、充分保護を加へて其の根絕を防せがねばならぬ、日本は櫻花國を以て世界に誇つて居る、同時に公孫樹國たる名譽を兼有してゐることを忘れてはならない、其の擁護保存の任に當るべきものは、言ふまでもなく、植物の趣味を最もよく解し且つ之を愛する、園藝家の手に待たねばならない。

公孫樹の價値を述べるに當つては、尙忘るゝことの出來ぬ重大なことがある、夫れは此の樹の繁殖作用が、他の植物のやうな花粉ばかりの媒助でなく、其の花粉の中には動物のやうに、一種の精蟲が棲息して、其の微妙なる作用に依つて結實することである。此の驚くべき大發見は、理科大學の平瀨作五郎氏に依つて成つたので、氏は理科大學の植物寫生を擔任し、傍ら植物を研究して居る中、明治二十六年七月始めて、此の作用に着目し爾來惠心其の研究に從事した結果、遂に此の大發見を完成したので、

明治四十五年帝國學士院は、氏の功を賞し者干の奬學金を授與し、氏の偉績を洽く世に表彰した。

然し公孫樹の精蟲は、植物學上から觀ればこそ、實に重大な事件であるが、現今の盆栽界には別に何の影響も無いやうだ、けれども後年培養法が益々進歩して來て、此の精蟲の作用を應用するやうになれば、從つて園藝界にも多大の變動を來すことにならうと思ふ。

自然の儘に成育した公孫樹の姿を見ると、矗々天を摩す所、唯一種森嚴な趣を備へて、誠に神社佛閣の建築に如何にもよく調和するのを認める、質朴にして勇勁な枝の出方や、老樹になつて樹皮が乳形に垂れる態や、梢の枝が悉く北に靡いて居る姿、これには矢張種々な、口碑や傳說が傳へられて居る、多少理窟に陷つては居るが、此の北に靡く原因に就いては、公孫樹が春先芽を吹き、新らしい枝を伸ばす時は、必らず南風が吹く、柔軟な枝は知らず知らず其風に靡いて、遂に樹の特性となつてしまつたと云ふのである、其の鮮かな美しい綠葉、黃金の翼を擴げたやうな秋の黃葉は、古來相應に文人墨客の賞讃を博し、蕪村は其實に向つて

稚兒の寺なつかしむ公孫樹の實

と吟じ江戸座の俳人晉基角は

そのかみの供奉の扇や散いてふ

と吟じて居る、黃金色に數く公孫樹の落葉を、供奉の檜扇に比して、平家沒落の有樣など偲ばせた所には無限の感慨が籠つて居る。

銀樹挿天知故國　丹樓拔地見層城

と山陽外史が賦したのは、熊本城の大公孫樹に淸正公を追慕した際である、明治の文學に於ても、蒲原有明氏は『春鳥集』に『公孫樹』と題して、此樹の詩趣を歌ひ、蒲田泣菫氏は詩集『廿五絃』の卷頭に『公孫樹下に立ちて』の一篇を載せて居る。

『いてふ』の語源は、元來『一葉』から來たと云ふ、俗に『いてふ』の木、又は『ぎんな

ん』など、呼ぶ、『公孫樹』は『汝南圃史』の記す所、其葉の形鴨の脚に似て居る所から、同書には『鴨脚樹』とも記して居る、其他『正字通』には『平仲木』『通雅』には『火蠹木』『浙江通志』には『佛指甲』『袁世府志』には『白果樹』と呼んでゐる、白果や銀杏は果實に依つて命名されたのであるが、葉に依つて命名されたのも中々多い、雌雄株を異にして居るが、盆栽としては果實を結ぶ雌木の方が珍重されて居る。

公孫樹の盆栽培養法は、元來此樹は盆栽として適當な樹が非常に少いので、多くは厭條か接木である、從つて葉を小さく附けたり、果實を結ばせたりなどするのは中々困難である、現今盆栽界に行はれて居るのは、多く壓條で、實生の如きは極めて少數である。

壓條の方法は、春先臺木から、成るべく整つた枝を選定し截り取り、下の切口から上の方約五六分位の處を、左右から『八』の字形に切り込み、切り込んだ處へ、根を一部分切り挿入し、水苔若しくは土で蔽ひ、其儘地中に栽ゑて置けば、軈て根は充分附着して、健全に發育するやうになる、茲に注意すべきは、枝の切口と、根を挿入する抉り口の間を成るべく短かくすることである、若し此間が長過ぎると、忽ち下から腐り込んで、可惜今迄の苦心も水泡に歸せしめてしまう。

かくて根が全く附着したら、鉢に取つたやり、姿勢を作つて行く、植替に就いては種々説もあるが、之は却つて行はず、其儘にして置いて、肥料を潤澤に施してやる方がよい、果實を澤山結ばせやうとする時は、灌水、肥料何れも充分に施し、花時には決して動かさぬやうにする、花は大抵四月頃、新葉と共に咲くものである、花が謝して果實を結ぶ、秋になつて漸く黄色に色が付いて來ると落ちてしまうのが多い、之は重に水の不足から來て居るのであるから、水は成るべく充分に施してやる、水盤に水を充たせ、夫れに鉢を入れ、底の穴から吸收させてやる位にする、土が乾燥してしまへば、例へ折角果を結んでも多く落ちてしまう、姿勢は大概直幹である、之は公孫樹の性にも依るのであるが、古くなると根張にも益々雅致を帶びて大木を偲ぶやうな姿

となる、秋の盆栽としては眞に趣味の豐かなものである。

野菊（のぎく）

花卉園藝界は、漸く菊の季節に近づいた、开で私は此に盆栽としての菊に就いて述べて見たいと思ふ。昨今菊の培養家は、『盆栽作り』なる名稱を附して盛に小菊類の培養を試み、陳列會や品評會にも、必らず此の盆栽作りなるものが現はれて、在來の大菊や正菊に對峙して居る有樣である、處で、此の『盆栽作り』なる小菊類は年々に其の栽培が盛になつて、或は中菊以上に及んで居る處もある、京都の如きは其の一例で、作り方も年々進歩して行く樣子である、趣味の方面から觀れば確かに此の方が面白いのである。

盆栽界の方から見ると、菊の盆栽なるものは、秋のものとしては、重要な位置を占めて居るが、之は菊の培養家の所謂『盆栽作り』とは多少趣が違つて居る、之は世間でも全く混同して居るやうであるから、一寸其の違つて居る點を說明して置かう、菊の培養家の所謂『盆栽作り』なるものは、小菊類に限られて居るが、花其物は、多少人工的のものである、形も懸崖作りに限られて居る、然るに盆栽の方面で用ゐる菊は、人工的技巧を經た小菊で無く、純粹の野菊である野生の儘のものに形の上に技巧を施したものである、故に色彩の美は遙かに、菊栽培家の『盆栽作り』に勝るが、形の點は遙かに優り、懸崖式の千遍一律に陷ることが無い自然の儘の色彩を尊重して、あまり華美なものを避けて居るのも、其の特長として擧げることが出來やう、以上が兩者の異る點である。

然らば盆栽界で用ゐる、菊、即ち野菊には如何なる種類があるか、主なるものを左に列擧して見やう。

美濃養老野菊、高臺寺野菊、富士の山菊、白玉野菊、白花管咲野菊、薄色野菊、黃花管咲野菊、十五夜野菊、紺菊、黃花平咲野菊、白花平咲野菊、白花狂野菊、

菊樺野菊、極紅野菊。

此の外菊科のものとして『嫁菜』も用ゐられるし、龍腦菊も稀には見る、此の中で最も珍重されて居るのは美濃の養老野菊で、之は美濃金華山附近には澤山の野生があり、其の花の形も高雅であり、色も嫌味がなく盆栽としては、餘り華美なものを喜ばぬ風があるから、其の注文にはよく合つて居る、高臺寺野菊には、色も二三種ある、蜀紅もあれば、白もある、黄もある、花瓣が細く正しく、野菊の中では優れたものである、葉の刻み込み深く、形の整つて居るのでも、他の種類中此に勝るものがない、『富士の山菊』は、裾野一帶各處に自生して居るから、園藝家は既に知らるゝ處であらう普通の野菊類に比して、花の輪がやゝ大きく、花の色は乳白色で、如何にも朴訥な、野趣横溢といふ風がある、紺菊は一寸嫁菜に似て居るが、其の色が非常に濃く、其の名の通りである、葉も小さくて、よく花と調和して居る、十五夜菊は、恰度十五夜頃に咲くといふので其名がある、從來投入花などには屢々用ゐられて既に雅客の愛好する處となつて居る、此の種類などは決して所謂『盆栽作り』の小菊には見られぬ處である。

仕立法といふのは、少し六ケし過ぎるが、其の形の上に就いて、仕立方の注意をすると、養老野菊や、高臺寺野菊などは、懸崖作りが適し殊に、高臺寺の如きは無數の花をつけて、其の美花を誇ることが出來るが、此のみが盆栽作りではない、紺菊や十五夜菊の如きは、寄植が最も面白い、石でも配して其の周圍に栽ゑると中々雅致がある、富士の山菊の如き、又枯葦や細かい草物に添へて、古人の句意など示すもよく、松に配して『三徑就荒、松菊尚存』などの意を寓するのも面白い、之等も亦、盆栽趣味で、蛸作りの盆栽作りとは多少趣きを異にする處である、鉢から論じても、盆栽界では、壽老盆でも、平鉢でも、水盤でも自由に使用する、夫れが菊家の方の『盆栽作り』のやうに、丈けの高い、壽老盆式のやうに限られて居ない、即ち形に於ても極めて自由故、夫れが總ての方面に、かかる影響を及ぼすのである。

扨て此等の野菊は如何に作るか、培養方面にかけては、菊專門家の方には充分な造詣があることゝ思ふから、盆栽家側の用ゐて居る平時の極く大體丈けに留めて置きたい、先づ四月から五月の半にかけて、根分けを行ふ、(普通の菊は冬至が根分けの季節とせられて居る樣であるが)开して、鉢に取るものは取り、地植にするものは、植込んで、大體の區分をする、土は眞土でよく、若し鉢に取るならば、此の際深目のものを用ゐて置く、よく深い鉢に土全部を入れる人があるがあれは愚の極で、第一取扱に不便である、風で倒れぬ位の重量を得させ、底へは木炭を入れて置く、之は空氣の流通をよくするし、水ぬきも自由にゆくから、草の發育にも大層よいのである、夏に向ふと盛に新芽が伸びて往くから、ある程度迄は枝數を殖やす爲め、適度の摘み込みも行ひ姿勢の調節を圖つてやる、肥料も其頃から、十分に施してやらねばならぬ。

懸崖作りにするには、其の中心が適當の長さまで伸びた時、琉球(疊屋の用ゐる)で自然自然に吊り下げるやうにする、其の形の定まるのは、失れ程長い時間ではないから、間際へ來てからでよい、餘り早くから曲げると花附の惡くなるものである、懸崖でないものは摘み込みを適度にして、餘りに丈けを伸ばさぬやうにする、肥料は油糟を稀薄にしたものが便利でよく、地植の時には、やはり稀薄な人糞肥料を施す、灌水を怠らぬことと、蟲の驅除は野菊の培養にも缺くべからざる必要條件である、かくして肥料も相當に行き渡れば秋の末になると、下葉の紅葉も見られて、趣味も亦格別である。

甘藍(はぼたん)

甘藍(はぼたん)は、蔬菜として、現在最も需要の多い、『キャベージ』と同じ十字科植物の、人工的變化を經たものである、此のやうな植物が、盆栽に仕立てられて、立派な觀賞植物となるのは、趣味の上から見ても非常に面白く、培養する上から見ても、極めて趣味が深い。

由來、盆栽植物といへば、多く針葉樹や、濶葉樹の類で、草といへば、高山植物などが多いのに、蔬菜の中から擇ばれて、盆栽に仕立てられるものは、此の甘藍ばかりといつてよい、元來甘藍は、十字科に屬する食用植物であること、既に述べた通り、原産地は歐洲の西海岸であるといふ、之が漸次各地に移植せられ、品種が改良せられ、立派な蔬菜の、『キャベージ』となつて、日本には蘭人の手を經て、長崎に先づ到着し、夫れから漸次全國に分布したのであるが、觀賞品となつたものは、初め支那に往き、彼地で種々の變化を來し、夫れが日本に渡來したので、原は種類が同じであつたものが、日本に來た時は、花まで變つたものとなつて居たわけである。

支那に此の植物が入つたのは、何時頃であるか、文獻に徵すべきものも少いので、殆んど不明であるが、『甘藍』といひ、『蕃牡丹』などの別名ある處を見れば、少くとも百年や二百年前のことではない。

日本で、此の植物が盆栽として流行するやうになつたのは、明治の初年頃で、之は德川末期に於ける文人畫流行の遺響を受けて、園藝界では未だ、萬年青や、紫金牛などを、妙に捻くつて愛玩して居た時であるから、甘藍の如き、特色に富んだものは、忽ち歡迎せられ、一時非常な流行を極めたわけで、よくいへば文人趣味であるが、惡くいへば、一も一も無く支那の眞似といはれても仕方がない。

併し其後日本の盆栽家の手に渡つてからは、流石に其の培養の上にも苦心に苦心が積まれて、形の上にも工夫が凝らされ、今日では立派に盆栽として位置を保つやうになつた、夫れのみならず、盆栽の境地から脱し、西洋種の草花などゝ共に、毛氈花壇にさへ植栽せられるやうになつた、需要の廣くなつたことは、此の植物の爲めに喜ぶべきである。

甘藍は日本では『はぼたん』と呼んで居る、蔬菜の方では『たまな』である、其の葉の色が、薄紫で多少紅を含み、脈のみ綠を殘し、其の紅紫色と、綠色の調和が色彩の上からの美觀を呈し、初めは『たまな』といふが如く、球形にして、漸次一葉一葉づゝ外

部に展開して行く、其の姿勢が恰も牡丹の花のやうなので、『葉牡丹』と稱せらるゝに至つたので、近頃西洋風の毛氈花壇などに植込むものを見ると、斑入のものがあり、白と紫と交錯した色彩を呈したものもあるが、之は眞の文人風には餘程かけ離れてしまつてゐる。

扨て、此の甘藍の盆栽は、何時が一番趣味が深いかといふと、人に依り好みも異にして居るが、矢張秋で、下葉が下ちて、根莖に其のあとを印し、一寸懸崖風になつた處などが、一番面白く、之れは外の盆栽植物の到底及ばぬ處、南畫家の好んで畫題に取る處のものである、春は大根に似た淡黃色の花を開くが此の花の咲く頃は、姿勢も全く崩れて眞の觀賞には適して居らぬ、矢張幾分根莖の露出した時、鉢に取つて眺めるのが一番趣味が多い、故に其の培養には、恰も春の中から、漸次心にかけて手入をしてやらねばならない。

甘藍の仕立方は、他の盆栽よりも、少し困難である、それ故、斯道に於ては、難物の中に數へ、餘程老練家でないと、うまく培養出來ぬものゝやうに思はれて居る、夫れは初めの年丈けは、相應に效果を收めても、翌年になると、漸次勢力も衰えて來て、形が崩れてしまうからである。併し手入を十分にして、持ち込みを上手にすれば翌年も矢張同じ姿が眺められる。

其の第一に注意を要するのは、植替である、之は盆栽の手入としては、極めて重要なもので、此の植物に對して、殊に念入りに行はねばならぬ、先づ培養土としては、眞土を極く柔かにし、篩でふるひ、鉢底には、其の篩目に殘つた粗い方を入れ、上方に細かい土を入れる、土は成るべく固まらぬやうに柔かく植ゑ、根も成るべく深く植えることを要する、鉢は普通の平鉢よりも、深いものの方がよい、そして年々に土の分量を增して行く。夫れは、此の植物は根の發育が非常に强く、絶えず新しい根が出るから夫れに對する自然的抵抗力も强くする爲め、かく土を增してやるのである。

肥料は成るべく濃厚なるものがよい、地植のものならば、人糞肥料が最も適當なの

であるが、鉢に取り床の間や應接室に陳列するものであるから、人糞は避けて、油糟か他の人造肥料などを用ゐる、油糟は素人が用ゐても安全だから、一般には之を推す、次は葉の摘み込みで、之は姿勢を作る上に、極めて必要な事である、何故に葉の摘込が大切であるかというと之は牡丹の花瓣を見るやうに、葉の形を縮めて數を多くする必要からである、故に出來る丈け注意し、先づ芽が出たら、二葉を殘して摘み取り、更に葉が出たら二葉殘し、かうして內部へと摘み込んで行く中に漸次に形が纏つて來る、摘み込は春の頃から土用の頃まで續ける、殊に夏の中は害蟲の驅除に、注意しなければならない。

次は冬季の持ち込みである、原產地が暖帶のもの故矢張、寒氣を怖れる、霜に合はせると忽ち葉が枯れてしまう、故に十一月の半頃からは、徐々霜除けの用意をしてやらねばならぬ。又、春になると莖を抽出して花を開くが、之を開かしてしまへば、夫れきりで終つてしまうから、莖を伸ばさぬやうにする、若し種子を取つて實生で殖やさうとすれば、前のものは全く失はれるのである。

欅（けやき）

春は芽先の姿優雅を極め、夏は綠葉に萬斛の涼風を呼び秋は其葉色付いて、所謂『槻もみぢ』の雅致ある風情を見せ、冬は其葉悉く落ちて、細枝糸の如く綾の如く、忽ちにして枯木疎林の肅條たる野趣を偲ばせるもの、これ欅の盆栽である、欅はかく四季其時に從つて、容を改め姿を更へて往くが、此自然の特性を最も遺憾無く發揮するのは、冬期落葉後の形態で、寒樹の姿勢に於て趣味の深いもの、盆栽樹木中、先づ欅を第一にあげねばならない。

欅は其の古名を槻といひ、槻は『つき』で『强木』の義で木質堅く强い所から斯く名付けられたと云ふ、併し今日では槻は欅の一種ではあるが同一のものではなく、立派に區別されて居る、唯其の差が極めて僅かで、專門家でなければ見分けつかぬ位である

から、科學思想の幼稚な古代にあつては全然同じに視て居つたのである、從つて其當時槻と稱せられて居る樹は、今日の欅も槻も皆含まれて居るのである。寺島良安の『和漢三才圖會』には、欅槻の種類を擧げて、『眞欅』『石欅』『槻欅』と稱し、『本草綱目啓蒙』には

欅、けやき、一名欅楡(通雅)、けやき、俗にも欅の字を用ふ大木なり、春新芽を生ず、櫻の葉に似て鋸齒大なり、木は殿柱箱案等に用ふ、良材なり、まげやき、いぬけやき、つきけやき、いしけやきの品あり。

とある、其の秋の紅葉を、『槻もみぢ』として詩人の吟詠に上つて居るのは、隨分古くからであるが、其の最も初めとすべきは、『萬葉集』第十三卷に收められた、『雜歌』の中の長歌であらう。

鳴る神の、光るみそらの、なが月の、時雨の降れば、かりがねも、いまだ來鳴かず、かみなびの、清き三田やの、垣津田の、池のつゝみの、もゝたらず、五十槻ケ枝

山毛欅（上）
株立の姿勢で、宛ら雜木林の一角を見るが如き心地がせらる、株吹の好摸範である。

欅（下）
欅は從來鋒作りが多いのであるが、此の木の如く、よく自然の眞趣を傳へたのは少い、欅の代表的名樹である。

に、みづえさす、秋のもみぢ葉、まきもたるをすゞもゆらに、手弱女に、われは
あれども、ひきよぢて、峯もとををに、うち手折り、我れはもてゆく君がかざし
に

『夫木和歌鈔』には左の三首を載せてゐる。

けふ見ればゆみきるほどになりにけりうゑし岡邊の槻のかた枝　前中納言定家

關守がゆみにきるてふ槻の木のつきせぬこひにわれおとろえぬ　修理大夫顯季

君が代はおほはつせちの百枝つきもゝえながらも榮えますかな　俊頼朝臣

欅を盆栽として仕立てるには、第一に樹の性質をよく吟味する必要がある、欅本來の性を考へ、之を盆栽として不調和の無いやうに、姿勢の正しいのを擇び、幹に傷があつたり癖があつたりしない、優等の樹を撰び、其の樹の姿勢に應じて、いらぬ枝や葉は悉く切り取つてやり、餘り曲つた枝は矯め直してやらなければならない、此の手術を施すのは、成るべく鉢へ取らぬ前、地栽の時に行うてやる方がよい、鉢へ取つて

からでは、どうしても出來るのが遲く、殆んど、三年と一年位の差を生じて來る、その仕立てる時期は、未だ芽の萠さぬ一月の中旬頃がよく、先づ枝の先を一應剪定して置き、夫れから順次枝を矯めるのである、之は針金をかけるので、其際には針金に柔かに紙を卷き、それから懸けてやる、若し紙を卷かずに懸ると、必らず鉢に針金の痕を殘し、醜くなる、之は如何に手入をしても、一度痕がつけば迚も回復の出來るものではない、十分注意すべきである。

次は根張や姿勢を作る注意で、成るべく枝の數を增すことである、糸のやうな細い枝を澤山生じさせ、梢を美しく整へるには、肥料を充分に施し、春先三月頃になつたら一回植替を行うてやる、之を行はぬと枯死する枝が出來て、折角の苦心も水泡になつてしまうことになる。

植替が濟むと、やがて芽を出して來る、葉が開いたら二葉殘して摘み込む、伸ばしたい枝は、二葉若しくは三葉殘し、漸次摘込んで行けば、葉の出方も美しくなつて往く、植替の時用ゐる培養土は、他の盆栽のやうに、壤土即ち眞土七分に、砂を三分程混合する、砂の種類は山砂か川砂が適當である、海の砂は決して使用することが出來ない、植替が濟んで、約二週間ばかり經過したら、初めて稀薄な肥料を施し、漸次濃くして往く、肥料の種類は他の盆栽と同じく油糟が、最も弘く用ゐられて居る、分量は、月に五六回宛で、其時期に應じ加減してやる、置場所は空氣の流通をよくすることが第一の要件である、失れでなくとも、枝の細かい樹であるから、若し置場所が惡ければ、小枝の間へは忽ち蟲が巣をかけて、害を釀すことがある、日光浴も適度に受けしめ、冬季は窖の中に取入れて、嚴寒を避けてやらねばならぬ。

培養上殊に重要なのは、摘み込みで、之は絶えず注意し叮嚀に行つてやる、若し之を怠る時は、忽ち葉が大きくなり過ぎたり、不要の枝が俄かに伸びて姿勢を崩すものである、種類に就いては、曩に『和漢三才圖會』の説を揭げたが、盆栽界では、更に『眞欅』『楡欅』の二種に分け、『眞欅』の中でも、如輪質と云ふて幹に龜裂を生じ古色のあ

る樹類が、殊に珍重されて居る、葉の方では、紅葉質、黄葉質と分け、紅葉質は稀品として値も甚だ高い、葉は大抵二三分の大きさ迄に、仕立てることが出來る、自然の儘の葉は一寸五分位あるから、之も驚くべき園藝上の進歩といはねばならぬ、姿勢は以前は鋒作りと稱し、直幹で圓推形に作つて往くのが流行したが、今日は餘り行はれず、夫れより自由な自然的な姿勢の方が專ら行はれ、寄植などが非常に流行するやうになつた。

草物盆栽

盆栽植物の範圍は、年々に擴大され、其の利用應用法の進歩するが如く、植物の選擇にも著しい進歩が見えて來た、是が爲め從來の固定された盆栽植物の外に苟も植物として、多少形態上、若しくは文學上趣味のあるものならば、何でも取つて以て盆裡に培養せんとする傾向が一部の盆栽家の間に、唱へられて來たのである、所謂雜木盆栽趣味の流行は其の一例であるが、近來野草の方面にも其の手が伸びて來て、美しい趣味のある草物が大分現はれて來た、之は單に觀賞の上からのみでなく、野に置けば、徒に繁殖して、田畑等にまで累を及ぼすものを、斯く園藝品に仕立て上げるのであるから、一種の廢物利用法ともいふべく、大きくいへば國家經濟の上からも奬勵すべきことである、併し此の場合、國家經濟など云ふ八ク間しいことは云ひたくない、野路の雜草一つだに徒らにせず、之を培養するだけで、趣味は實に十分である、然らば如何なる草が之に適するのであらうか。

今日まで草木の中で、盆栽植物として取扱はれて來たものは、決して少くない、例へば福壽草、雪割草、支那産水仙、蘆、風知草、野菊、菫、寒蕨、蘭、石菖など主なもので、殊に蘭や石菖は、所謂文人風盆栽の流行と共に一時は非常に流行を極めたものである、處が此等の草物は純粹の野草と謂ふべきものでは無く多くは多年人工に依つて培養されたもので殊に福壽草、雪割草の如き、全く栽培植物となつてしまつて居

る、秋の七草、即ち奈良朝の詩人、山上憶良が萬葉集に收めた七種の歌の
　萩が花、尾花、葛花、撫子の花、女郎花、また藤袴、朝顔の花
の如き、之は野草とは謂ふものゝ、撫子の如き、朝顔即ち桔梗の如き、萩の如き、立派な栽培植物となつてしまつて居る、故に新しい意味の草物は、是等のもの以外に求めなければならない。

先づ春の郊外にあるもので、盆栽趣味の野草として今日まで取扱はれて居るものは、さくらさう(櫻草)すみれ(菫菜)(外國種のパンジーを含まず)たんぽゝ(蒲公英)れんげさう(紫雲英)たぜり(田芹)たねつけばな(碎米薺)はゝこぐさ(母子草)すぎな(杉菜)るりさう(瑠璃草)さぎごけ(鷺苔)かやつりぐさ(嚊吊草)なづな(薺)などが最も喜ばれ、殊にたんぽゝ(蒲公英)などは平鉢にでも仕立てると、實に立派なものになり、れんげさう(紫雲英)も其の根を石に絡ませて、石附などにし、或は其の根を洗ひ、所謂根洗ひ物などに仕立てると趣味も格別であり、すぎな(杉菜)の如きは培養が巧者になると、單に葉ばかりでなく、つくし(土筆)もこと更一しほ興が深くなる、夏のものでは、いたどり(虎杖)とくさ(木賊)しのぶ(葱)水草では、藻の類、たぬきも(裡藻)むじな藻、もうせんごけ(毛氈苔)などの食蟲植物、みゝかきぐさ(耳掻草)じゆんさい(蓴菜)おもだか(澤瀉)あさゞなどの水草類の外、しやが(胡蝶花)なども中々面白いものである。つゆぐさ(鴨趾草)も面白いものになる、秋の野草では、秋の七種を初めとして、せんのう(剪秋羅)まつむしさう(松蟲草)われもかう(地楡)りんだう(龍膽)かるかや(苅萱)おとぎりさう(弟切草)等がある、以上は既に盆栽家の手に依つて、立派に仕立て上げられ、自分の目に觸れ手にしたものゝ中、記憶に存したものを數へあげた丈けで、この外にも盆栽として仕立てゝ見られる要素を具備したものは幾何でもある。

扨て此等の野草類は、如何に仕立てたらよいか、先づ大別すれば、單獨栽培と寄植である。單獨栽培は其の一種類のみを栽培し、寄植の方は、數種類一盆の中に栽培するので、何れも夫れ夫れ特長はあるものゝ其の郊外の風趣を居ながらにして眺め得

らるゝと謂ふやうな趣味は後者にある。一つの平たい鉢の中に、たんぽゝ(蒲公英)が黄に、すみれ(菫)が紫に、れんげさう(紫雲英)が紅色に咲き其他小さい各種の野草が雜然として生ひ茂り、此方につくし(土筆)が出て居るかと思へば、彼方にるりぐさ(瑠璃草)が頸を傾げて居るなどの風情を見れば、身は既に春の郊外にあつて、蟬と共に長閑な日を受けて遊んで居るうやな心地にならう松柏とか、竹とか梅とかいふやうな、一株千金もする如き立派なものも、元より盆栽には相違無いが、此の種のものに至つては、眞に格別である。

併しながら此種の野草を盆栽に仕立てるには、中々困難である、野路にあるものを直ちに取つて盆裡に移すが如き簡單なものではない、例令其の方法にして、野路から採取し、之を栽ゑるにしても、夫れは初めの一年丈けで二年も三年も續けて其の趣味を味ふことは出來ない、夫れには持ち込みと謂ふことが肝要である、持ち込みの方法は、人に依つて違ふが、先づ庭の日當りのよい處を撰び、土壇を築き、採取して來た野草類は一旦此に植ゑる、かくして一年草は一年にして枯れ、宿根草だけは殘るといふ風になるが、一年草も花が濟めば實を結び、夫れがこぼれて翌年になれば、又芽を出すといふ風になるから、夫れを叮嚀に育てゝ行く、強い草には、多少摘み込みをして、莖や葉をつける、適度に肥料を施して、根や莖の強壯になるやうにする、かうして二年も三年も、手を入れる中には、形も自然に縮まつて見事な草となる。开で春なり、秋なり、季節に從つて、其の種類を適度に選び、野邊の風致を取つて寄植にすればよいので、自然の植物生態をよく研究し、如何なる草は、如何なる風に生育するかを見て、之を盆裡に現はさねばならぬ。

日當りのよい處を好む草と、羊齒類のやうな陰地の草とを一所に植ゑたり、高所にあるべきものが、低くなつたり、低い處のものが高い所にあつたりしては、その興趣を殺ぐものである、最も古文學に依り、其の風致を寫すが如き場合はこの限りではない。

併し元來盆栽の目的は、自然の風致を尺寸の盆の中に現はすのであるから、此の目的に適合せぬものは、眞の盆栽とはいへない。

次に鉢であるが、是等の野草類を仕立るには、大抵は平鉢を用ゐる、深い鉢では面白味が少い、種類は南蠻とか白交趾とか、朱泥とかいふ種類がよい、餘りに華美なものは、草との調和が決してよいものではない、是から草物盆栽は益々進歩するのであるから、一般の園藝家に向つても、此の點に注意されて一度は試みられんことを希望するものである。

趣味と培養　盆栽　終

趣味と培養　盆栽
定價二圓五拾錢

大正十四年五月十五日　印刷
大正十四年五月十八日　發行

著者　東京市赤坂區青山南町一ノ一二六　金井紫雲
發行者　東京市芝區櫻田久保町四番地　松本卯八
印刷者　東京市芝區愛宕町二丁目十五番地　正木晴

三賞舍印刷所

版權所有

發行所　東京市芝區櫻田久保町四　交誠堂書店
振替東京二九五五九番

ZhbZ-80

落